

部戦線に於ける公認従軍記者として、其功勞を認められ、何れも勳爵士ナイトに叙せられ、其の姓名の上に、サーを冠するに至つた。此等の消息は、能く此の書中に語りてある。

優待時代の急先鋒

彼は記者の虐待時代を突破して、優待時代の急先鋒となつた。彼は而して此の虐待時代に於ても、多くの難關を超乗した。此れ一は彼の勇氣と、氣轉と、冷靜と、自信とによつたが、他の重なる一は、ノースクリフ卿が、彼に與へたる忠言、即ち『恒に善く修裝せよ』と云ふ言葉を、服膺したからだ。此の如くして彼は、佛國ブルボン家の結婚に、西班牙王の一行と伴うて、悠々として乗り込んだともある。又英皇エドワード七世の側に立ちて、其の皇姪コンノート殿下の肩を、皇帝が叩きつゝ、早く美人の配偶を求めよと戯れ給ひたるを、立聞きしたるとも出來た。

北極探検

ギッブスの種取りとしての腕前は、北極探検者と稱するドクトル・クックの化

者の化けの皮を剥ぐ

けの皮を剥いだ一事によりて、發揮せられた。此れは彼に取りては、實に容易ならぬ度胸を要した。彼は自から丁抹に出掛け、クックの船を、港の外に迎へ、親しくクックと對話し、其の返答の曖昧にして、其の態度の明快を缺くを見、疑念を生じ、其の北極に赴かずして赴きたりと、駄法螺を吹きたる證據を突き止め、之を直ちに發表した。當時英國の老記者ステッドの如きさへも、ギッブスと與にコーペンヘーゲン〔丁抹の首府〕にありて、飽迄クックの肩を持ち、世界の各地から集つた四十有餘の新聞記者は、何れも此の偉大なる探検者の成功に陶醉し、同地の大學はクックに最高の學位を與へ、天下を舉げて、クックを謳歌しつゝあるに際して。獨りギッブスは、クックを嘔吐さの大山師と公言し、長文の電報を、英國の新聞に發し、其の反響は、乍ちコーペンヘーゲンに出來り、此れが爲めに彼が終生の新聞記者たる運命さへ、危くせんとしたるも、彼は遂ひに大なる勝利を得、他日老記者ステッドをして、我過てりと、男らしく兜

獨り大山師と公言

を脱がしめた。

善種悪種の揀分け

種取りの本職は、只だ種を取るばかりではない。善き種と、悪しき種とを揀り分けねばならぬ。此の判断力が、種取りに缺く可らざる資格だ。唯だ珍らしくあり、面白くあり、世間を驚かしさへすれば、眞偽の詮議などは問ふ所でないとするは、是れ種取り記者として、初心者と云はねばならぬ。

三

浮動的新聞記者

ギッブス氏は、浮動的新聞記者であつた。即ち記者中の渡り者であつた。云はば彼は自から主宰者となるには、聊か物足らぬ所があり、他に役せられて、忠順なるには、聊か謀反氣があつた爲めであらう。されど此の浮動的、渡り奉公人的、野武士的行徑は、彼をして新聞界に於ける、より多く、より大なる冒險者たらしめた。

彼とノースクリーフ卿との接觸

彼とノースクリーフ卿との接觸は、實に面白い。彼は田舎の記者であつたが、

ノースクリーフ卿の光景

功名心抑ふる能はず、他日のノースクリーフ卿、當時のハームスウォース氏に、一書を飛ばした。折り返し來訪を求めたる返書が到着した。

彼は轟く胸を抑へつゝ、其室に導かれた。眼前に現はれたるは、さつぱりしたる衣を著け、容貌秀俊にして、顔は奇麗に剃り立て、其の廣き額には、房々したる鶯色の髪の毛が掩ひ、其の褐色の眼は狎れくしき、然も人を喰うた様な眸子を、此方に向けてゐた。彼は深き安樂椅子に腰掛け、葉捲烟草を薫しつゝ、ギッブスが齎らし來れる文を讀みつゝ、時々まづくないとか、いや妙だとか、獨語しつゝ。且つギッブスを顧みて曰く、

若者よ、御身は青白い、當分佛蘭西の南に赴き、靜養したらばどうだ。

ギッブスの目的

と。併しギッブスの目的は、身體の保養でなく、フリート街（倫敦に於ける新聞街）の空氣を呼吸するものであつた。それでは御身は、

デーリー・メール新聞の第四頁を編輯し、且つ毎週二回づゝ文を書くことゝ

したらば如何。

相談極つて編輯者一人

相談は此にて極つた。ギッブスは踴躍して田舎に還り、約一ヶ月の後に、一切の事務を片付け、其の少妻と小兒とを伴ひ、倫敦に出で來り、再びノースクリフを訪ふや。才かに四週間を隔て、ノースクリフは最早、殆どギッブスの顔を忘れてゐた。況んや其の約束をや。第四頁の編輯者は、彼が到着する以前、既に他人が任命せられてゐた。然も今更ら致し方なく、彼は其者と兩人して、編輯を當分分擔するとなつた。

ノ脚は新聞商

ノースクリフは、近來に於ける新聞界の、世界的成功者の一人であらう。されど彼の成功は、唯だ新聞を多く賣捌くと云ふに止まつた。彼は新聞商である、新聞製造業者である。而して此の意味に於ての一大成功者である。彼に向て新聞記者の天職とか、新聞紙の責任とかを語るは、恐らくは野暮の骨頂であらう。彼は本來さる考は持つて居ないのだ。

四

ノ脚に關する批評

ギッブスのノースクリフ脚に關する批評は、寧ろ正鵠を得たるに庶幾い様だ。彼が新聞種としての採擇の標準は、只だ一。それは此れが自分に面白い事である乎、否乎の一點だ。一たび面白いと思へば、子供が「如何に」とか、「何故に」とか、其の問題を追窮する如く、それに熱中して、其の好奇心を、一面に擴充し、それを突き留めねば止まぬが、彼の本色だ。

世間の買取り

世間では彼が恒に公衆の必要とする所を豫知し、機に先だち會に投じて、その折々に之を授與するが故に、成功したりと云ふも、それは全く買ひ被りである。

予の所見

予「ギッブス」の所見では、彼は小兒の單純に、聊かの狡獪と術策とを、滅金した男だ。彼が主要とするは、公衆の欲する所を與ふるでなく、己の欲する所を與ふるにあつた。彼の成功は、寧ろ尋常平凡人の有する、あらゆる性格

新聞界に於ける冒險

街頭の氣分を發揮

を、最高度、最多量に有したるが爲めであらう。即ちつまらぬ事に騒ぐ氣分や、目先の變化を好むことや、小六ヶ敷理窟や、研究や、探討を厭ふ心や、何事も手速く、手短かにやりてのける調子や、あらゆる街頭の人々の有する性僻を、濃厚に有し、それを大膽無遠慮に發揮したが爲めであらう。

編輯會議の模様

當時『デーリー・メール』に於ける會議の模様は、左の通りだ。

此の時分が一生の花

其の時分は、日毎にデーリー・メール社に於て會議があつた。編輯局長、部長、寄書家、探報記者、乃至、高等給仕に至る迄、皆な一室に會同し、其の階級に頓著なく、何れも自由に意見を開陳した。而して苟もノースクリフの意に中るものあらば、即座に賞讃せられた。而して彼は當日の新聞をそれ〴〵批評し、其の缺點を指摘し、其の長所を獎譽した。葉捲や、紙捲の烟草は勿論、茶菓さへ供せられ、奇譚口を衝き、笑聲堂を撼かした。此の時分が、彼の一生の花であつたらう。

小節細目のみ

併し斯る際とても、彼の論ずる所は、只だ區々たる小節や、細目にて、予〔ギップス〕は未だ曾て彼が莊重、深厚の思想や、偉大、崇高なる志趣の閃めきを、見たとがなかつた。

面白き新聞を多賣

惟ふに彼れノースクリフには、天下經綸の大抱負や、經國濟民の大精神やは、恐らくは宿らなかつたであらう。彼の當初は、只だ面白き新聞を作りて、多く賣る事であり。それが案外に成功したるや、彼は其の勢力の偉大なるを恃みとして、我が新聞社内に於ける勢力の延長を、政治の上にも試みんと欲して、失敗したのであらう。要するに彼は寧ろ、力負け、位負けしたのであらう。

身邊の殊寵者の事

彼は毎に其の身邊に、一二の殊寵者を持つてゐた。されど一たび寵を得たる者は、必ず久しからずして之を失うた。ギップスの如きも、其の一人であつた。彼は言ふ可き事も、言ふまじき事をも、ギップスには打開けた。彼は當時未だ流行稀れなる際に、其の自動車にギップスを同乗せしめ、其の別荘に伴うた。や

がて彼は倦厭の情を生じ、幾許もなくギップスは失意の人となり、遂ひに彼の機嫌を損じ、退社を餘儀なくさせられた。

五

年少成金者の非望

先年成金時代に、或る年少の成金君が、記者に向て、今後存分に、金を贏けたる曉には、是非新聞を一つ作つて見たいものと云うた。記者はそれは結構の話であるが、幾許の金で作る積りかと聽きたれば、いや百萬圓位は使つて見たいものと、さも愉快氣に答へた。

新聞創立は至難事

併し此れは素人考へだ。今日の日本でも、百萬圓や、二百萬圓で、新たに有力なる新聞を作ることとは、絶對的不可能の事とは申さぬが、然も決して容易の事ではない。それには餘程の天才か、餘程の幸運者か、將た何かの奇法、魔術でも持つ者でなければ、寧ろ至難の業であらう。言ひ換ふれば、新聞に金は大切であるが、金のみにて出来るものではない。

トリビューン新聞の話

ギップスが、本書に掲げたる「トリビューン」新聞の話は、全くそれを事實の上<sub>上</sub>に於て、立證してゐる。今ま少しく之を摘録するであらう。

亡父遺言状の一條件として

抑もトリビューン新聞の創立者兼所有主と云ふは、トマスソンと云ふ、丈高く、好男子で、然も何やら憂鬱さうなる年少紳士であつた。彼はランキャシャイルに於ける、大なる紡績業者の子として、英國に於ける大金持の少年の一人たる、不幸を擔うてゐた。兎に角父の遺言状の一條件として、倫敦に於て自由主義の新聞を創立す可きであつた。固より單純なる理想家である彼は、父の遺志を遵奉する神聖なる義務として、之を實行した。而して彼はウェストミニスター・ガゼット新聞の老記者であつたヒールに托するに、編輯局總務を以てした。

何れも諫止忠告

新聞事業に經驗と知識ある連中は、何れもトマスソンが、此の企畫を危み、それ／＼諫止もし、忠告もした。

新聞界に於ける冒險

バーレル  
氏の忠告

予〔ギップス〕はヒール、及び創立者トマスソンと相伴ひ、バーレル氏を訪問した。氏は自由党内閣の愛蘭大臣としては、失敗したが、好々爺たる文學者として、論文家としては、超卓の一人だ。對話の末、我等が愈よ氏に向て、新計畫の文藝顧問たらんことを懇請するや、氏は其の目を瞬きしつゝ、トマスソンに向て。

予が愛するトマスソン君よ、予は御身の父上とは、相識の間柄であつた。而して最も尊敬してゐた。御身の父の友として、予は御身に忠告する。そは御身が、今更十萬磅〔約二百萬圓〕の金を、予の取引銀行に、無條件的の寄附金として拂込み。斯くして此のトリビューン新聞の發刊を、思ひ止まつたならば、御身は莫大の損失を免かるゝであらうと。

豫言適中

此の豫言は、正しく適中した。彼はやがて三十萬磅〔約三百萬圓〕の金を、此の企業の爲めに費消し去つた。

六

賑々敷發  
刊の初日  
にケチ

『トリビューン』新聞は、金持の金に任かせて、實に賑々敷發刊した。發刊の初日には、倫敦中の乗合馬車や、運送馬車に、『トリビューンを購讀せよ』との文字を、白布に書きて宣傳した。然るに當日は、折悪しく大風雨の日にて、其の宣傳の白布は、馬蹄や車輪の泥に塗れて、一二時間も經たぬ間に、散々の體たらくとなつた。此の如く始めからケチが附いた。

一大饗宴

却説又た發刊の前夕は、政治及び文藝方面の知名の人々を招待して、一大饗宴が催された。トリビューン社の四壁は、温室の珍卉名花もて装はれ、酒は泉の如く、社員は何れも此の甘美なる洗禮に陶醉し、中には随分狂體やら、醜體を演ずるものもあつた。而して社長たるトマスソンが歸邸の後。社の重役の一人は、滿悦の餘、其の卓上の花籠などを、饗宴の電燭や、音樂にて見物に押し寄せたる浮浪者共に與へて、尙ほ慊らず、更らに其の室内の大時計さへも、取り

社一重役  
の酔興

新聞界に於ける冒險

下して、與へんとする光景にて。人々は餘りの事に、電話もて社長を呼び返へし、漸く其事を取り留めた程であつた。

面白くない新聞

却説新聞は發刊せられた。然も面白くない新聞で、誰も悦んで購讀せんとする者は無かつた。文藝欄の擔當者たるギップスは、あらゆる大家、名家の作品を蒐集した。キップリングの短篇小説の如きも、此の紙上に掲げられた。コンラッドの傑作である、自傳の若干も掲げられた。チェスタートンは、定期の寄書家となつた。されど此れが爲めに、何等紙數の増加を來さなかつた。而して紙數少き新聞の恒として、廣告欄振はなかつたから、紙面は何となく單調で、鈍重で、愈よ人好きがしなかつた。

編輯總務の交替

此の如くして編輯總務ヒールは、其志を得ずして去つた。彼に代りてプライオアは來つた。此の愛恭ある小さき漢は、本來ノースクリーフ流儀の、新聞製作術を心得てゐた。彼は『トリビューン』を、『デーリー・メール』と爲さんとしたが、其

の結果は、却て少數なる眞面目の讀者を失うたのみにて、新購讀者を得る所は無かつた。此の如くして持主トマスソンは、二個年の後に、約三十萬磅〔三百萬圓〕を烟散霧消した。

運命極處に瀕す

最早該社の運命は、極所に瀕した。記者の一人は、自由黨内閣の機關紙として、其の補助を請ふ可く、愛蘭の首都ダブリン府にある、愛蘭事務大臣バーレルに、左の意味の電報を發した。

八百人の生命は、彼等の妻子の生命と共に、一に予が閣下に會見を請ふ事に繋がる。

バーレルと記者との會見

バーレルは、此の驚く可き電報に接して、其の會見を允した。記者は其の高帽を、側の卓子に措きつゝ、左も沈痛の面色もて。

閣下 トリビューン新聞は、方さに死なんとす。之を見殺にして差支ありません。すまひ乎。

それは當然の歸結

バーレルは、眼鏡越しに、其目を見張り、客の顔を眺めつゝ。左様、トリビューンをして、死せしめよ。それは當然である。と。此の如くして此の新聞の運命は、愈よ極つた。

七

約二週間の生命延期

ギッブス氏は、此の運命の極りたる『トリビューン』新聞の生命を、約二週間延期せしめた。それは自由黨に縁故あるカーライル伯爵夫人の、義侠心に訴へたからだ。彼女は矯風主義、廓清主義の熱心者で、當時ギッブス等が、其の紙上にて、禁酒運動を興行しつゝあるを、心から賛成し。此れが爲めに該紙が、他に賣り渡さるゝ迄の間の、該社員は一切の俸給、及び勞銀を保障するとなつた。

最後の夜到來

されど斯るケチの附きたる新聞を、誰も買ふ者とはなく、遂ひに最後の夜は到來した。

社長トマスソンは、蒼白く、悲惨なる、然も一大決心したる面色もて出で來

社中の死活問題

り、其の社員に向て、愈よ今夕が最後の夕であるとを宣告した。社員の一人は氣絶した。多くの者は涕泣した。而して室外には、印刷部の連中が、此の極所に於て、或は何かの活路が開くるであらうと、空ら頼みして、其の様子を覗うてゐた。何となれば、此れは彼等に取りて、直ちに其の妻や、子供のバンや、バターの問題であるからだ。

然も幸運は開けなかつた。ギッブスは左の如く語りてゐる。

與に死したる心地

宣告の後、予は數多の同僚と、姑らく烟草を喫しつゝ相ひ語つた。とてもトリビューンが、此際往生したとは信せられない。此れは單に事業的の失敗ではない。我等の持てる或者、即ち我等の希望も、努力も、我等の頭腦や、腹心の働らきも、此れと與に死したる心地がする。

新聞は抽象的の物件でない。それは生命ある機體だ。乃ち或る男子や、女子やの精神に鼓吹せられ、其の理想や、志望に生動せられ、其の頭腦によりて

巨船の沈没の如く



經緯せられたる機體だ。即ち彼等の生活の冒險を導く生ける車輪だ。予は半夜を過ぎて、漸く一友と與に、最終の退去をした。是迄明晃々たる電燭は、乍ち暗黒となつた。その光景は、宛も巨船の沈没の如くであつた。一友は「死」「死」と呼びつゝ、其の帽を死の前に打ち揚げた。

新聞社は、一の帝國だ。何れの新聞社にも、所謂傳統的精神がある。其社の滅亡は、其の傳道的精神の滅亡だ。『トリビューン』紙の如き、僅に二個年の齡ある新聞さへも、其の最後は、此の如く悲劇である。況んや十數年、若しくは數十年の歴史あるものをや。記者はギップスの記事を読んで、坐ろに同情に禁へ難きものがある。

八

ギップスは、軍事通信員、即ち從軍記者として、大なる成功者であつた。世界大戰に際しては、從來此の方面に於ける有名なる老練記者は、何れも失敗した。

新聞社と  
傳統的精神

從軍記者  
として大  
成功

そは彼等は舊套を株守しつゝある際に、此の戦争は、あらゆる仕組に於て、全く新局面を打出したからだ。

此の四個年半に互れる戦は、此の期間を經過したる凡ての人に於ける如く、予に取りて、一生涯中の尤もすばらしき經驗を與へた。此れが爲めに従前の凡有る冒險も、印象も、事功も滅盡せしめた。自分は若々しき氣分と、理想とをもて從軍した。自分は戦争中に於ける、多くの人々の勇氣や、辛抱や、慘禍やを目撃し、知悉して、肉體上にも、精神上にも、全く異なりたる老成人となりて、還り來つた。

すばらし  
き經驗

戦争と人  
心の悪化

彼は斯く自白してゐる。實に此の戦争は、其の實物教育によりて、多くの人に幻滅を與へた。彼等の空に描きたる黄金の壁の傳奇は、實際の泥土の上に、鮮血もて塗り潰された。此の世界大戰が、如何なる効果を齎らしたとするも、人心を悪化したるとは、間違あるまじ。

休戦後の  
影響深甚

然もギッブスは、戦争よりも、寧ろ休戦後に就て、其の影響の深甚なるを看破した。

四個年半の世界大戦の後、平和の到来は、宛も開戦の時と、同様なる刺戟を與へた。予は寧ろ極端に緊張したる人の心理や、徳性に與へたる影響は、開戦よりも休戦が、更らにより多く悲惨であつたと思ふ。

茫然呆然

平和が来るや否や、此迄最高度に釣り上げたる心は、乍ち弛み出し、茫然、呆然、昏々然たらしめた。

剩す者は  
戦後の惨  
状

從來勝利の爲めには、何物をも犠牲としたる気分は、今や一變して、其の跡始末の總勘定をするとなつて來た。此の如くして從來の燃るが如き熱心は、消磨して、今は懊惱と、嗟嘆と、零落のみ。四顧茫茫、剩す者は只だ戦後の惨状のみ。而して此の悲哀や、幻滅の精神は、戦敗者よりも、寧ろ戦勝者の方に多かつた様だ。

戦後の人  
心奈何

此がギッブスの觀察の要領だ。如何にも尤もの言と思ふ。

彼は更らに戦後の人心に就て、斯く語りてゐる。

休戦後の四箇年間、予は歐洲、小亞細亞、北米等の浪遊者となりて、世界に於ける戦後の現状、及び其の心理的効果を洞察せんとを勗めた。即ち社會的、政治上表面の底に、あらゆる國民が経過したる、莫大の悲劇によりて、動搖せられたる思想、及び感情の深き流れを洞察せんとを勗めた。

一方に歡  
樂一方に  
絶望

予は隨處に、精神的、及び道義的訓練の、從來緊肅したるものが、頹弛したるを見た。而して乍ち歡樂の有頂天となり、乍ち沈鬱屏息する、神經的交互の變化を見た。歐洲各地の都府には、放逸、淫蕩、享樂氣分漲り、歌舞、飲宴、酒は泉の如く、美人は花の如く、電燭は晝の如き周邊には。飢餓や、無職や、疫病や、絶望に泣き、不平と謀反氣とを漲らして、此の光景を詛ひつつある群集を見た。

痛快の觀察 如何にも痛快なる觀察だ。尙ほ此の外にも、抄録す可き件少からざるも、姑らく此に止めて置く。(大正十四年二月)

### 政治家の晩節

アスキス氏牛津伯となる

牛津伯と  
なる  
頃ろ英國自由黨首領アスキス氏は、牛津伯となりて、上院に入つた。英國の輿論は、彼の政友と政敵とを問はず、皆なアスキス氏が、終焉の地を得たるを賀した。予は此事に就て、端なく政治家の晩節を考へずして已む能はぬ。

せめて上院に  
彼は日本流の年齢から云へば、七十四歳だ。彼の下院生活は、四十年。而して今や昨年の暮の總選舉に落選し、然も最近に於て、補缺員として選舉せらる可き望は、殊んど見附からぬ。斯る場合に、政治界の浮浪人として、議院外にあ

るよりも、せめて上院に在りて、此の方面から、一黨を指揮するとも、最善と云はざる迄も、次善に相違あるまい。

極めて豊饒の天分

アスキスには、門地は無かつた。富も無かつた。されど彼は極めて豊饒なる天分を持つて生れた。彼は何れの學校でも、首席であつた。牛津大學に於ては、カーゾン、ミルナー等の諸英俊の間に於て、特に光を放つてゐた。彼は牛津の大先生ジョウエットの愛弟子であつた。彼は牛津同盟の長に擇ばれた。彼は大學に在る際に於て、既に首相の器である可く、豫期せられた。

虞翁最後の内閣の一閣内相

彼は一八九二年、虞翁第四次、即ち最後の内閣に、一躍内務大臣となつた。彼の行政家としての手腕は、此際より天下に認められた。チェンバレーンが、關稅改革の新旗幟を掲ぐるや、其の後を追跡して、其の精嚴なる論理、其の明快なる辯舌、其の自信ある態度もて、之を論駁し、殆んどチ氏をして、奔命に疲れしめた。一九〇五―六年に於ける、自由黨の大勝利は、固よりキャメル・バン

ナーマンの勝利なるも、其の一半は、彼が自由貿易主義もて、チェンバレーンの關稅改革論を破碎したる功に歸せねばなるまい。彼が大藏大臣となり、一九〇八年には、バンナーマンの後を承けて、首相に躋つたのも、決して不思議ではない。

大戦中聯合内閣の首相

爾來彼は世界大戦迄、自由党内閣の首相であり、大戦中聯合内閣の首相であり。而して一九一六年十二月、遂ひに一種の陰謀によりて、辭職の已むなきに至り、其の同僚であり、且つ右手である可き筈であつたロイド・ジョージは、代つて更に別に聯合内閣を組織した。

爾來在野の人

爾來今日に至る迄、彼は在野の人だ。而して一九一八年十二月の總選舉には落選したが、一九二〇年二月の補缺選舉にて、漸く下院に復歸するを得た。彼が昨年十二月の落選に際して、再度の補缺選舉を待つ能はなかつた理由の中には、如上の行掛りあることを知らねばならぬ。

英帝政治の手ほどき

伯爵拜受

英國皇帝ジョージ五世は、アスキスの才略と云はんよりも、其の人格に最も傾倒せられてゐた。皇帝即位の際は、彼は宛も首相であつた。政治の手ほどきは、アスキスが授けたとも云ひ得らるゝ。されば彼の落選するや、皇帝は直ちに伯爵を授けんと、内命を下された。然もアスキス氏は、熟慮の上、奉答す可しとて、埃及旅行の途に上つた。而して彼は其の政友とも相談の上、愈よ之を拜受するとしたと云ふ。其折には固より、保守党内閣の首相ボルドウィン氏の、諒解を経たには相違あるまい。

英皇帝と相得

多くの場合、斯る榮譽は、責任ある國務大臣の奏請によりて行はるゝが、英國政治の慣例である。然も此回は既に去りつゝある労働党内閣首相マクドナルド氏も與らず、方さに來らんとしつゝある保守党内閣首相ボルドウィン氏も與らず。全く皇帝の親裁に出でたる一事は、如何に彼が皇帝と相得たるかを知るに於て、餘りあらむ。

無色透明の人格者

公論反對者に出づ

アスキス君の品性は、國民的信用の擔保である。彼は潔白に戦ふ、勝つも驕らず、敗るゝも恨まずと。此れは彼と久しき政敵のバーケンヘッド伯の讚辭、公論反對者に出づるものと云はねばなるまい。

善き頭腦の持主

アスキスは、恐らくは英國政治家中、唯一と云ふ能はずんば、第一の善き頭腦の持主の一人であらう。但だ彼は黨首としては、縦横の機略に乏しく、此れと同時に、民衆を率ふる煽動政治家的の氣分に乏しく、而して黨人を隨喜せしむる熱情—無しとは云はぬが—の發揮に乏しくある。

彼の度胸と相當の廣さ

彼は必らずしも臆病ではない。成さねばならぬと信ずる所は、如何なる事をも、思ひ切つて成すだけの度胸はある。されど此は彼の理性より判斷して、相當の事と認むるが爲めである。故に彼に取りては、大事も小事の如く、小事も大事の如く、何たる區別はない。彼は何時でも相當と云ふ所を爲すに過ぎぬ。何時

も相當だ。

太平の宰相

されば太平の宰相としては、殆んど申分なき一人だ。然も虎豹龍蛇、出沒隱見、所謂る一世の智勇を推倒し、萬古の心胸を開拓するが如き機變に處するは、彼の長所ではない。彼が大戦初期の首相として、思案投首者と嘲笑せられたのも、多少の理由はある。

天成の大審院長

彼は意見者よりも、他の意見の審判者だ。彼は透明であり、精細であり、確實であり、公正である。彼は天成の大審院長だ。然も天は彼をして、急轉直下の時勢に於ける、自由黨の首領たらしめた。彼が虞翁の衣鉢の相續者と稱せられつゝ、虞翁程の働きを爲す能はなかつたのは、時勢の罪と云はん乎、將た彼の罪と云はん乎。

虚心坦懐

彼の黨首としての缺點は、全く其の無色透明なる點である。併し彼には見掛けによらぬ熱情もある。而して凡有る政治家中に於て、彼の特色の一は、其の雅

量だ。虚心坦懐の四字は、彼にして始めて當て嵌まる、彼は決して人を咎めない。敵を咎めぬのみでなく、味方をも咎めない。味方の裏切者、反逆者をも咎めない。彼が一九一六年十二月首相辭職の際は、其の政友、若しくは僚友の或者から、無慘の待遇を受けた。彼も亦た人だ、其の胸中には、多少の懊惱もあつたであらう。されどそれを機微にも漏らさなかつた。正しき意味に於ける紳士とは、彼の事であらう。

正しき意味の紳士

政友僚友に忠實

此れと同時に、彼の特色は其の政友、若しくは僚友に對して、忠實なる事だ。彼が政治上の失策、若しくは彼が一身上の損害は、餘りに其の僚友、若しくは政友に忠實に過ぎるが爲めだとは、一般の彼に對する公論だ。然も斯る批判は、或る意味に於ては、賞讃よりも高價なる頌辭であらう。

寸前 暗黒

一寸先は暗の世

人間は自から萬物の靈長などと威張り散らす、其實は一寸先は暗の世だ。明

アスキス氏とモ卿

日は愚か、一時間先の事さへ豫知は出来ない。曾てモーレー卿の回顧録を讀むに、アスキス氏が、バンナーマンの後を襲ぎ首相たるに際し、印度大臣であつたモーレーに向て、其の内閣に踏み止らんことを請うた。元來アスキスは、モーレーの後輩だ。彼は幾分か氣兼したのであらう。然るにモーレーの返答は、意外であつた。貴君の註文とあれば、踏み止らないこともないが、予を上院に入れて呉れまいかと。

モ卿の上院入り

アスキスは、眼を圓くして驚いた。御身が上院に入るを望むとは、抑も何事である。アスキスの驚いたのは尤だ。モーレーは、曾て上院を改革せねば、廢止するとの警語を發したる當人だ。その當人が、今更ら上院に入らんとするは、不可思議だ。別に仔細はない。モーレーは、齡已に七十を過ぎて、下院の活戦場に入出入するの、煩に堪へないからであつた。勿論アスキスは、モーレーの望通りにして、茲にモーレー氏は、子爵モーレー卿として、上院の一員となつた。

時代の潮流に牽引

然るに今や其の眼を圓くして驚いた當人のアスキスが、牛津伯として、上院の一員となるとは、抑も如何に運命は、人を翻弄するものであらう。然も今日に於ては、彼の政友も、政敵も、誰も之を怪しむものはない。時代の潮流は、實に意外の方角に、人も事も引張りて行くものだ。而してそれが宛も當然の事として引張りて行く。

再度の落選と皇帝の恩命

アスキスは偉大なる平民として、世に立つた。彼は其の大先輩虞翁の衣鉢を、此の一事に於ても、相續する者として、期待せられた。然も彼の再度の落選と、近き將來に於て、下院に於て、其の議席を得らる可き見込なきときは、遂ひに皇帝の恩命を、拜受するの他、詮すべなきに至らしめた。此次はロイド・ジョージだ。せめて彼は大平民として、始終せしめたきものである。(餘計なる世話ながらも)

ジョージ

若しジョージが、一九一八年十二月、總選舉の前後に死したらんには、彼は

の將來は如何

クロンウェル以上の大人物として、英國の歴史を飾りたる一人となつたであらう。然も爾來彼の運星は、漸次に傾き、一九二二年十月には失脚して、在野の人となり。今日に於ては、彼の與黨は、殆んど一臺の乗合自動車に、搭載するに過ぎないではない乎。併し今後如何に其の運星が廻轉する乎、是亦た人間豫想の及ぶ所ではあるまい。(大正十四年三月)

### 大勢と人爲

世界大戰

今更考へても、詮なきことながら、世界大戰は、果して避く可らざるものであつた乎。果して人類に幾許の利益を與へた乎。

其の禍害

今日迄のところでは、世界大戰の利益として、歴擧す可きものは、禍害として歴擧す可きものに比して、九牛の一毛だ。長き目をもて見たらんには、其の拂

うたる犠牲に相應するだけの利益は、追々と出で來るであらう。又た出で來らせねばならぬ。

それが問題

但だ果して避く可らざるものであつた乎。將た避けんとすれば、避け得可き方便もあつた乎。それが問題である。舟をナヤガラの瀧口に乗せかけてからは、議論は無い。只だ瀧壺に落つるのみだ。併し其の上流に於ては、必ずしも落ちる所迄、行かねばならぬことはあるまい。避けんと欲すれば、避け得らるゝ。況んや人事に於てをや。

氣運乎大勢乎

或は氣運と云ひ、或は大勢と云ひ、或は環境の壓迫と云ひ、或は周邊の雰圍氣と云ふ。而して人はそれに盲從するのが、殆んど宿命であるかの如く考へられてゐる。

是非なき英獨衝突

此の見當からすれば、英獨の衝突は避く可らず、世界大戰は禁ず可らず。兩者の決闘は、是非もなき次第と云はねばならぬ。

人事を大勢に推諉

併し人事は、左程窮屈のものではない。大勢は大勢だが、大勢を作るも人、大勢を興すも人、大勢を導くも人、大勢を動かすも人、大勢を轉ずるも人、大勢を移すも人。人は大勢に乗ることもあり、又た大勢を避くこともある。此に於て知る、人事を大勢に推諉するは、畢竟、臆病者か、怠惰者の遁辭であることを。

國家の存亡と人物

國家は一人を以て興り、一人を以て亡ぶなどゝは、餘りに個人を重視し、社會を輕視したる言葉であるかの如く覺ゆるが、然もその實は決して然らず。歴史的の事實は、往々之を證明してゐる。例せば、我邦に於ける保元平治の亂の如きは、全く個人的葛藤の擴張、若しくは延長であつた。

エドワード七世傳の上卷

頃るサー・シドニー・リーのエドワード七世傳の上卷が刊行せられた。此れは英國皇太子時代に止まりて、其の即位後の事は、下卷に約束せられてある。併し此の上卷は、吾人に向て、種々の教訓や、暗示を與へてゐる。



寧ろ前獨  
帝の彈劾  
史

其中にて最も昭著なるは、前獨逸皇帝に關する一件だ。書中或る部分は、エドワード七世傳と云はんよりも、寧ろ前獨逸皇帝ウキルヘルム二世の彈劾史と云ふが、適當でないかと思はるゝ程だ。

仲悪の叔  
姪

前獨逸皇帝は、エドワード七世姉の子。即ち彼等は叔姪の間柄だ。然るに此の叔姪は、如何なる宿世の因果にや、初から仲悪であつた。エドワード七世は、英國皇太子たる頃から、其の父親は獨逸種であつたに拘らず、獨逸嫌ひであり、佛蘭西好であつた。固よりビスマルクも嫌ひであつたが、少壯時代彼の門人とも云ふ可かりし其姪ウキルヘルムは、猶更嫌ひであつた。

個人的不  
親善と國  
家的親善  
の妨害

此の久しきに亙りたる、叔姪の個人的不親善が、英獨兩國の國家的親善を妨害するに、與りて力ありたるとは、決して無視す可きではあるまい。叔姪の喧嘩が、世界大戰の火元であると云ふは、餘りに大膽なる申分だ。されど此の喧嘩が、屢々出で來らんとしたる二國の調停を妨げたとは、理るまでもない。

前獨逸と  
英國女皇

ウキルヘルム二世が、少壯より、利いた風の生意氣小僧であつたことは、獨逸國民も、百も承知である。彼の祖母たる英國女皇は、三十六歳となつた獨逸皇帝を評して、

此の輕躁にして、己惚れたる若者よ。

と申された。併し女皇は尙ほ、愛女の子として、一點彼を慈むの心があつた。所謂お婆さんが、孫を可愛がる情味があつた。されど總ての人に愛慕あり、多くの事に寛裕である叔父は、此の姪をば腹の底から毛嫌ひした。獨逸皇帝が孫として、其の祖母の臨終に駈付けたる際も、其の叔父や叔母達は、之を驩迎しなかつた。

英獨競争  
の前途

英獨は商業的、經濟的帝國主義に於て、互ひに競争者であつた。併し世界は廣い、必ずしも兩立せざるものとも限られなかつた。兩國の識者中には、其の前途を憂慮し、豫め之れが計をなすを企てた者が、一二ではなかつた。而して

獨逸皇帝ウヰルヘルム二世も、心から不賛成ではなかつた。

曲は双方に在り

併し此間に動もすれば、個人的感情が累をした。而して其の感情の挑發者が、獨帝であつた乎、エドワード七世であつた乎。公平の見地からすれば、曲は寧ろ双方にありて、必ずしも獨帝の双肩の上のみでは無かつた様だ。

前獨帝と英首相

一八九五年〔明治二十八年〕獨帝の英國カウス港に滞在するや、英國首相ソルスベリ卿に向て、政治上に就き、意見交換の爲めに、其の御艇に來らんとを求めた。然るに卿は定時より、彼是一時間後れて見えた。獨帝は頗る癢に障りて、不興氣に待遇し、遂ひに友誼的對話に及ばずして止んだ。

英首相遂に應ぜず

然も獨帝は、翌朝更らに會話を開始せんとを約した。されどソルスベリ卿は、如何なる譯にや、遂に之を閉却し去つた。此れは有意であつた乎、無心であつた乎。何れにしても、獨逸から差し出したる手を、英國側では握らなかつた。

殖民大臣

當時の殖民大臣チェンバレンは、首相の所謂る光榮なる孤立主義を株守する

の努力空

に比すれば、新たなる時局に順應するの道を解得してゐた。されど彼の努力も、叔姪の不圓滿なる關係に妨げられて、何等の効果を見るに及ばなかつた。

叔姪と快走艇競争會

一八九二年〔明治二十五年〕より一八九五年〔明治二十八年〕間、凡そ四回、夏期の快走艇競漕期節には、獨帝は引續き、カウスを訪問した。此れは獨英親善の下心があつた爲めであらう。されど帝の叔父たる英國皇太子は、獨逸皇帝が餘計なるお節介を厭うて、斯く言うた。『元來快走艇競漕會は、予に取りては愉快なる遊樂であつた。然もそれが獨逸皇帝の統裁に歸してより、予に取りては苦悶である』と。

英帝の脱退

而して姪の快走艇メテオル第二が、叔父の快走艇ブリッタニカよりも、善き艇であることの證明せらるゝや、叔父は其艇を、競漕場より脱退せしめた。

層一層險惡に

是等は極めて子供らしき張合であらう。併しながら叔姪の間柄は、改善せらるるよりも、層一層險惡に赴きつゝあつた。

寧ろ叔父の憎惡心

流石はセシル・ローヅだ。彼は將來の形勢の危急を洞見し、一八九九年〔明治三十二年〕頃、叔姪の融和を謀つた。然も遂ひに行はれなかつた。而して其の行はれなかつた重なる責任は、寧ろ姪の猜疑心よりも、叔父の憎惡心に存した。

事件と個人の意志

歴史上の大回轉、大變局なども、往々一二個人の意志によりて、出で來り、若しくは出で來る重なる原由、若しくは動機となる例は、決して少くない。

孝明天皇の聖壽に就て

甚だ恐れ入りたる推測ではあるが、若し孝明天皇が、寶算三十六歳にして、慶應二年の末に崩御あらせられず、せめて四十歳迄の聖壽を延長し給ふたらば、維新の歴史は、必ず現在のものと趣きを殊にしたであらう。其の殊にしたる程度、及び色調の濃淡、高低等に就ては、銘々の了見もあらうが。然も其の殊りたるものであらうとの推測は、苟も心ある者は、誰も斯く判斷するであらう。

大勢と個人の関係

從來個人本位で、殆んど一切を裁斷し去りたる史家も、その反動と云ふではあるまいが、殆んど個人を無視して、大勢本位にて、一切を裁斷し去る傾きがあ

る。併し如何に大勢本位でも、其の大勢を作る根原は、多くは個人であり。而して個人の力は、往々にして亦た其の大勢さへも、制することがある。若し維新の當時に、岩倉と大久保と微りせば、縱令改革は出て來りても、其の改革は、現在のものと、必ず同じからずであつたらう。

或は世界大戦不發

假りにエドワード七世と、ウヰルヘルム二世との叔姪が、仲善くして、英獨兩國の當局者間に於ける葛藤さへも、兩者の間に、談笑して解決する程の間柄であつたとせよ。此れで英獨の決闘が、全く永久に停止せらるゝ乎、否乎は別問題として、或は世界大戦の慘禍を見ずして、止んだかも知れない。

英國と去獨就佛の成行

英佛協商の成立の如きも、エドワード七世の、本來の佛國愛好が、其の重なる動機の一であつたとせば、之を移して獨逸に求むるも、決して難きことではなかつたであらう。英國は或る期間、獨逸と結ばんとした。それが思ふ様に參らず、遂ひに佛國と結んだ。此れは十九世紀の末期から、二十世紀の初期にかけ

ての、明々白々の事柄だ。而して此の去獨就佛の成行に關しては、エドワード七世の個人的好惡の情が、興りて力大に居ることは、勿論だ。

意味深長の警句

返すくも吾人は、クレオパトラの鼻の、今少しく低くかつたならば、世界の歴史は、異つたものであらうとの警句の、意味深長なるを思ふ。(大正十四年六月)

レニンとトロツキー

評判程でなき著作

頃ろ、トロツキーの著したる『レニン』を讀む。實は評判程のものではなかつた。世間では此書の出版の爲めに、トロツキーは、失脚したと傳へられた。即ち仲間の者が、神様視したるレニンを、人間扱ひした爲めに、仲間の臆に觸れて、赤露の大幹部から追ひ出されたと傳へられた。然も讀み來れば、此處ぞと思ふ所は少しもない。

通讀を悔いす

記者は、之を通讀したとを、決して後悔はしない。此書は預じめ一書として、構成したものでなく、種々の場合に起草したるものを、綴り合せたものである。書物としては、殆んど體裁をなしてゐない。

されど面白し

されど流石はトロツキーの作だ。如何にも面白い。面白いと云ふは、如何にも能く穿つてゐる。有體に云へば、此書は『レニン』と命名してゐるも、其實は『レニンとトロツキー』と云ふが、適當である。トロツキーはレニンに就て、語るより以上に、自己に就て語りてゐる。此れはレニンを語る爲めに、餘儀なく然かしたの乎。將たレニンをだしにして、自からを語りたる乎。何れにしても此書を読めば、レニンを知るのみならず、併せてトロツキーをも知り得らるゝ。

人として恐怖す

トロツキーは、レニンに就て、何等不遜の言を吐いてゐない。又た慄らない口吻をも漏らしてゐない。彼はレニンを神として、崇拜してゐないが、人としては、尊敬と云はんよりも、寧ろ恐怖してゐる。

トロツキ  
ンとレニ

トロツキは、猶太種だ。猶太種は決して人を嘆美するが如き、好所は持たない。又た人を恐るゝが如き、弱點も持たない。而してトロツキは、頗る意地悪で、腹黒で、傲岸、自恃の漢である。然るに此漢が、レニンには、恒に一目も二目も措き。とても腕較べも、丈較べも、出來ない者と、當初から諦めて居たかの如きは、以て如何にレニンが、傑出の一大怪物であつたかゞ、想像せらるゝ。

世界大戦  
とレニン

若し世界大戦で、損得の兩横綱を擧げん乎、前者は前獨逸皇帝維廉二世ウヰルヘルムで、後者はレニン其人であらう。世界大戦は、世界各所に、大成金を作つたが、未だレニン程の大々の成金は、出で來るまい。若し其の世界に、波動を及ぼしたる程度から云はゞ、或は大奈翁以上かも知れない。兎に角好むも好まざるも、レニンはエライ漢であつた。或は大魔王乎。

所感を率  
直に

記者は今まレニンに頌徳表を上るではない、只だ此書を讀んで、自から感じたる所を率直に語る迄だ。レニンに就ては、記者も數年前「大戦後の世界と日本」に於て、叙し且つ論ずる所があつた。國民新聞の愛讀者中には、或は記憶せらるゝ諸君も在るであらう。

レニンの  
生家と兄

レニンは、世襲の小貴族の家に生れた。彼の兄は、亞歷山三世の生命に關する、陰謀事件の爲めに、刑死した。彼は大學の教育を受け、其の過激の言行の爲めに、西伯利に追放せられた。

彼は學者

レニンは、單なる革命家でなかつた。彼は學者であつた。彼は土地に關し、經濟原理に關し、社會學に關し、哲學に關し、大部の著述をなしてゐる。彼は獨逸の大學教授としても、一人前の仕事は、優に出來る程の學力を持つてゐた。

歐洲列國  
の事情に  
精通

彼は東西南北の人であつた。彼は露國を追はれて、歐洲諸國に放浪する十有餘年。其の各國の語學に通じ、讀み、且つ思ひ、思ひ且つ見、而して其の綜合大觀を得た。彼は實に歐洲列國の事情に、精通してゐた。

彼の知識慾

彼は獨逸語、佛蘭西語、英語を自由に話し、且つ讀み、且つ伊太利語をも解した。晩年赤露政府の中心人物となり、一身萬務を宰するの際にも、尙ほチェック語の文典を、徐ろに學習しつゝあつた。そはチェック・スロヴァキアに於ける労働運動と、直接の交渉を保たんが爲めであつた。彼が知識慾は、知識慾の爲めの、知識慾ではなかつた。

學者にして時務に通曉

儒生俗士は、時務を識らず、時務を識るは、俊傑にありと、支那の古人は云うた。そは學者は學問に囚はれ、書齋的小乾坤に窒息して、活動社界の大勢に接觸せざるを、意味したのであらう。然も學者たるレニンは、極めて時務に通曉したる、當代の一人であつた。

比類少ない人物

彼は決して空想家でなかつた。彼の頭腦には、屢氣樓なくして、數字があつた。統計があつた。活戦場の掛け引きがあつた。彼程の學者にして、彼程の實務家、彼程の思想家にして、彼程の活動家は、恐らくは他に比類多くあるまい。

味方を心服統一

凡そ事の難きは、敵と戦ふの難きでなく、味方を心服せしむるの難きである。敵を震懼せしむるの難きでなく、味方を統一するの難きである。此れは大なる仲間にあつても、小なる團體にあつても。

レニンの相手

レニンの惡戦苦闘も、腐敗せる露國の帝政を、相手とするのではなく、味方の凡有る共産主義者、社會主義者、革命家、陰謀者を、相手としてあつた。

不可抗的絶特の地位を占有

彼は決して天降りの首領ではなかつた。彼は仲間の凡有る競争者、對抗者を、放逐し、征伏し、蹂躪し、懐柔して、而して後其の不可抗的絶特の地位を占有した。此の消息は、最も痛快に、此書に漏らしてゐる。惟ふにトロツキーの如きも、當初よりレニンに心服したものでなかつた。彼はレニンの魔力に打たれて、とてもかなはぬものと諦め、而して後彼の片腕となり、レニンの死に抵る迄、兎や角女房役を勤めたものであらう。

強剛の意

レニンは固より鋼鐵の意志を有した。されどレニンの及ぶ可らざるは、唯だ強

志と善變  
出沒自在

剛なる意志のみでなかつた。彼は恒に機に投じた。彼は決して一本調子の猪武者ではなかつた。彼は實に善く變じた。所謂神龍の狎る可らざるが如しとは、彼の謂ひだ。彼は時に九天の上に在り、時に九地の下にあり。其の倏忽變化、出沒自在、殆んど驚嘆に値ひするものがあつた。

トロツキ  
は僮夫

彼に比すれば、精悍にして、能く動き、飽迄戦闘力に富みて、奇策縦横なるトロツキさへも、何となく僮夫らしく見ゆる。

評言的中

『彼は恐らくは歴史の製作所に於て、製産せられたる、最も極端なる功利者であらう。』とは、トロツキが、レニンを評したる一句。如何にも的中してゐる。彼は目的の爲には、決して手段を擇まず、又決して手段を誤らなかつた。

御身は鬪  
犬だ

革命仲間の一女史、レニンに語りて曰く、『プレチャーフは、獵犬だ。其の對手に吠え且つ吠えて、遂ひに彼を奔らしむ。御身は鬪犬だ、對手を咬み殺す迄は放さない。』と、全く適評だ。然りトロツキも、屢ば此の書中に、此の評語を

賛成の意味もて、引用してゐる。

一大專制  
の運用者

レニンは其の老先輩プレチャーフを始め、多くの者を、退治し盡して、革命黨を、全く彼の掌中に握つた。而して彼は事實に於ては、ツアル〔露國皇帝〕以上の、一大專制的の權力の運用者となつた。

十層倍の  
横著者

彼は縮む可き時には、飽迄縮み、伸ぶ可き時には、飽迄伸びた。彼は大勢の不可なるを見ても、尙ほ之を遂行せんとするが如き、一徹者ではなかつた。されど苟も其機に會すれば、決して中途にて、休止するが如き、生温るき漢ではなかつた。彼は恐らくは海色の綠面の持主たる、ロベスピヤスよりも、十層倍も横著者らしかつた。

目的の爲  
めには

彼は純朴なる露人よりも、其の策略に於ては、伊太利中世紀の政治家を、聯想せしむるものがあつた。彼は恐らくは世界の政治家中、最も不謹慎の一人であつたらう。苟も目的の爲めには、爲さざる所なく、忍びざる所なかつた。

主義の爲  
めに忠實

但だ此の如き漢子にして、仲間の敬畏、若しくは崇拜の標目となつた所以のものは、彼が自から私せざるが爲めであつたらう。別言すれば、彼が其の主義の爲めに、忠實であつたが爲めであつたらう。併し其の主義さへも、時と場合とには、聊か融通したる點もあつた。即ち彼が私有財産禁制の失敗を自認し、退却して、其の根本的經濟政策の立て直しを、試みんとしたるが如きは、其の一例だ。

己の爲め  
にせず

然も此れとても、彼一己の爲めではなかつた。政治家の信用は、己の爲めにせざるを以て、根本主義となす。此れはレニンに於て、尤も其の顯著なる例を見る。本書中にて、傳神の筆と云ふ可きは、演壇に於けるレニンの一章だ。彼が演説の終りに近くに際し、時々其手を、禿げたる前額に當て、汗の滴るを拭ふ様や。彼が演説を了るや否や、其の草稿を取り纏め、聽衆の大喝采より逃る可く、其の壇上より急忙に去る光景や。彼の首や其の肩に埋まり、其の頤や下に垂れ、

演壇に於  
けるレニ

其の眼や眉毛に隠れ、其の髭は不快の氣持にて、締りつゝある上唇に怒張する状や。如何にも眼前に彼を髣髴たらしむる。

レニンに  
於ける國  
民主義

而して特に注意す可きは、『レニンに於ける國民主義』の一章だ。

レニンの國際的であるは、稱説を要しない。然も彼自身は、最高度に於ける國民主義であつた。

の一句は、流石にトロツキーの眼孔が、滿洲大豆の如き眼孔者流と、撰を異にしてゐる。

外形一變  
の帝國主  
義的運動

惟ふにレニンの國際的、世界的は、只だ露國を本位としての運動だ。露國を根據としての運動だ。國家や國民を詛ふと稱せられたる彼等さへも、其の運動の本位は、國家と國民にあるではない乎。別言すれば、露國の赤化運動は、其の外形を一變したる、帝國主義的運動だ。

面白き逸  
話もある

本書中には、随分面白き逸話もある。例せばレニンが、巴里に於て靴を購うた



靴の交換

が、それが餘りに小くて困り抜いた。頼むトロッキーの靴が破れたから、それを譲り受けた。然るに彼等が相拉へて、劇場に赴くや、此の靴亦たトロッキーに禍ひし、其の趾を痛め、トロッキーは泣顔をなし、レニンはそれを調戲した。此の如く一對の靴を兩人して受授し、兩人して困却する杯、奇談と云へば奇談である。

唯物史觀  
一大怪物

レニンには残忍性があつた乎、否乎。それは明白でない。されど彼は恐怖と威力とが、其の成功に必須なるを確信した。彼は決して血を見るを辭しなかつた。彼には詩もなく、ローマンヌも無かつた。彼は實に唯物史觀の一大怪物だ。

(大正十四年八月)

### ユーゼニー皇后に就て

#### 一 那翁三世の皇后

病後に腰  
掛けるの  
お話し

私は昨年来病氣を致しまして、長く立つことは容易でありませぬから、甚だ失禮でございますけれども腰掛けてお話しするお許しを願ひたい。それに少し風邪を引いて居りますから、餘り大きな聲でお話しする事が出来ませぬ。其事も豫め御承知を願ひます。

ウキクト  
リアの親  
友

本日私のお話を申し上げやうと思ふことは、本年の七月十二日に亡くなられた、前の佛蘭西第二帝國ナポレオン三世の皇后であつた、ユーゼニーと申すお方の事であります。それに就きまして併せて、其の御親友であつた英國ウキクトリア女皇陛下の事にも少し關係がありますからして、話の筋を及ぼしたのであり

ユーゼニー皇后に就て

四二五

男子の立場から  
人を見る

ます。先程馬場君から性の自覺などと云ふことは甚だ宜しくないと言ふやうなお話でありまして、承つて見れば誠に其通りであつて、私も至極同感であります。此の演説者は大分馬場君とは年齢が違つて老人であるから、矢張り頭腦も少し舊式になつて居るのであります。矢張り性の自覺などと云ふことは長い間やつて來たのであつて、急にそれを——本日茲に馬場君の話を聽いて其場から——取去ると云ふことは出來ないので。正直な事を申すと、私は男子であると云ふ考を持つて居る者である、従つて男子の立場から御婦人を見ると云ふやうなことを、始終忘れないのであります。性の無差別觀は、至極であるが、從來は其の意味を取違へて、大概の男は、先づ女と云ふものゝ存在を認識してゐない。人類と云ふことは男だけであると云ふ考であつた。女と云ふものはテンデ問題にして居らなかつた。即ち男女無差別でなくて、女子無視であつた。併し斯く申す私は女と云ふものを始終問題にして居つたのであつて、社會

常に婦人  
を研究す

の事を考へるにでも、歴史を見るに就ても、婦人と云ふものがどの位の働きたのであるか、どの位の働をすべきものであるかと云ふやうなことを、始終研究して居つたのであります。元來男女の區別なくしてヒューマニティーの上から全體を達觀して行くと云ふことは、是は大乗、極々上々の話である。男女の區別なく、女を無視して、女などと云ふものは世の中にあるかないか、無くても宜いものゝやうにして、考慮の中に入れて置くと云ふことは、是は小乗にも達しない。極く——詰らない考である。私は男の對照には女と云ふものがあつて、其女と云ふものが、どの位の仕事を世の中にして居るかと言ふことを始終研究して居る。先づ私の立場は大乗迄行かぬでも、少なくとも小乗位の事はあるだらうと信じます。

婦人觀の  
大乘小乗

私はユーゼニー皇后の事を以上申上ました立場からして、始終考へてゐた。今

度偶然永眠せられた報を聞いて、感慨止む能はざるものがありました。何か書いて見たいと思うて居ましたが、遂に其折がありませんでしたから、今日は皆様のお許しを得て、其の一端をお話して見たいと思ふのであります。多分是は御婦人に向つてお話するよりも、私の仲間の男子に向つて話した方が興味のある問題である。貴女方は傍から立聴でもしてゐらした方が、或は宜しくはないかと思ふ位で、貴女方を正面の聴衆として申上げるのは、少し具合が悪いと思ひます。其爲め或は十分に私の思ふことを言ふことが、出来ぬかも知れない。小説家杯は、能く弱き者よ、汝の名は女なりとの言葉を繰り返しますが、私は強き者よ、汝の名は女なりと申して見たい氣が致します。それは本題のユーゼーニ―皇后に就て、別して其感を深く致します。

二 小説よりも奇なり

私はユーゼーニ―皇后にお目に懸つた事はない。歴史の上で知つて居るだけの事

男子に興  
味ある問  
題

皇后の生  
ひ立ち

である。新聞の上で見て居るだけの事である。實に此方の一代は小説よりも面白いと思ふのであります。ユーゼーニ―の生れたのは西班牙の田舎である。貧乏華族の家で、丁度生れた時は千八百二十六年、我國では文政九年、頼山陽が日本外史を全く作り上げた年であり、徳川將軍の家齊公が太政大臣になられた前の年であります。其の晩大變な暴風雨でありまして、雷が鳴るやら電が光るやらと云ふ眞中に、ユーゼーニ―皇后は生れたのである。此の人のお母さんは蘇格蘭スコットの血を受けた人であつて、お父さんは矢張り西班牙人である。貧乏華族であつたが、皇后の八歳の時、お父さんの兄さん、即ち皇后の伯父さんが死んだが爲めに、其家をお父さんが嗣いで、其の財産とモンデシオ伯爵の名を相續した。其の頃丁度西班牙には虎列拉があり、革命があつて中々住むに面白くないものだから、佛蘭西に行かれた。其家は元來、佛蘭西の革命の方に最眞した家柄であつて、兄さんの方はどちらかと云ふと西班牙の王黨であつたが、弟の方は佛

佛蘭西に  
移住す

ユーゼーニ―皇后に就て

尼僧の教育を受く

蘭西の革命派であつた。其關係からしてモンヂシオ伯は女房を携へ、子を携へて佛蘭西に向つたと云ふ譯である。それでユージェニーは佛蘭西で教育を受けた。而して特に尼僧の學校で、嚴肅なる教育を受けました。

得體の知れぬ那翁三世

話は飛んで千八百四十八年の革命後に移る。其頃モンヂシオ一家は佛蘭西に住しました。其の時分の佛蘭西には、御承知の通りナポレオン三世が大統領であつた。此ナポレオン三世、即ちルイ・ナポレオンと云ふ人は不思議な人なのである。豪傑だか意氣地なしか、少し伶俐であるかと思ふと、少し莫迦のやうでもある。一體得體の知れない人である。山師であるかの如く、夢想者であるかの如く、兎に角奇妙奇天烈な人です。此人は申上げる迄なく、父は所謂大ナポレオンの弟で、其母は大ナポレオンの愛妻であつたジョセフィンの、ナポレオンに嫁せない前の連れ子である。此人は初から自分が帝位に登る積りであつて、二度もさう云ふ芝居をしたのであります。自分で町の真中で大きな聲を出

議員より大統領

して皇帝陛下萬歳などと叫んで、俺を皇帝にしろと言つた。それで此奴はひどい奴が居ると云ふので、フン縛られて牢にぶち込まれた。それで一度は亞米利加に、一度は英國に逃れたと云ふやうな人である。其ナポレオン三世がとうとう千八百四十八年の佛蘭西革命の騒ぎの時に英國から歸つて來て議員になつた。議員から一躍して大統領になつて仕舞つた。さうして自分がエリゼーの宮殿の主人公として盛に人氣を煽つた。其の時分大概やかましい人間はすつかりフン縛つて仕舞つた。彼は案外智慧のある漢オセであつた。で、新聞の發行停止なんのと云ふまだるつこいことをする必要はない。寧ろ新聞を作る者を片ツ端からフン縛つて仕舞へと云ふので縛つて仕舞つた。議論する者や、少し筆が立つたり、演説が出來さうな者は、片ツ端からフン縛つたり、追拂つたりして仕舞つた。それが所謂當時のクーデターである。ヴキクトル・ユゴーの罪惡史と云ふ本を御覽になると、ナポレオンが寢込みに刑事をやつて、悉く志士をフン縛つて仕

有名なきクーデター

ユージェニー皇后に就て

舞つた事が、詳細に書いてあります。

三 那翁三世の即位と結婚

絶世の美人  
シオ嬢

所でルイ・ナポレオンが丁度大統領になつた時分に、モンヂシオ伯爵一家は、矢張り佛蘭西の大革命に關係のあつた家柄であるから、夜會に招ばれたり、舞踏會に出たりしてゐたのである。而してモンヂシオ嬢は實にエリゼー宮に於ける、花形の一でありました。彼女は非常な美人で、迎も形容などと云ふやうなことが出來ない程の絶世の美人である。それだから自然お母さんが連れて夜會にも行けば人の眼に立つ。而して一番誰の眼に立つたかと云へば、大統領ルイ・ナポレオンの眼に立つた。ルイ・ナポレオンは始終其娘さんに特別な注意を拂ふと云ふやうな事になつて、それから大分上流社交界に問題を惹起した。まあ平つたい言葉で云へば、嫉妬とでも申すのでありませう。日が経つて行く中にナポレオンは遂に本來の目的を達したのである。其の手段は國民の總投票に訴へ

上流社交  
界の問題

一般投票  
で皇帝と  
なる

たのであります。即ち俺を皇帝にした方が宜いと思ふ人は宜いと投票しろ、嫌と思ふ人は嫌と投票しろと一般投票にかけたのである。さうして選舉干渉所ていこうぢやなくして、反對する奴は片端から虐め附けたものだから、其の投票と云ふものは無論ナポレオンに來たに相違ない。それでナポレオンは、自分は國民の意思を代表して佛蘭西の帝位に就いたと云ふことになつて、とう／＼一般投票で皇帝になつて仕舞つた。是が千八百五十二年であります。我が日本の嘉永五年、米國水師提督ペルリが日本に來た前年の事であります。

ユルゼニ  
と宗教  
的教養

それでルイ・ナポレオンは既に皇帝となつた。此次の問題は皇后である。一體ナポレオン三世と云ふ人は餘り品行の方正でない人で、其方では評判の良くない人ですけれども、ユルゼニ嬢は宗教の教育を受けて居つた方であつた。さうして嬢は色々評判の悪い方でありましたが、是は概ね嫉妬の結果で、他の事は兎も角も身持は確かな方の様に承はつて居ります。是は歴史の上には書いて

ユルゼニ皇后に就て

皇帝を跳  
れ付ける

ないけれども、斯う云ふ話が傳つて居るのである。ナポレオン三世がユーゼニ嬢に向つて狎れがましき態度をした時に、ユーゼニーは嚴然として、『私の手をお握りにならうと思ふならば、先づ教會の門戸を経由してお出でなさい、神様の前で誓つた上でなくては御免を蒙る』と申されたさうであります。結婚の成立の由來は、先づ下の通りである。千八百五十二年の十一月、ナポレオン三世が狩場に行つて、其狩場にはユーゼニー嬢や其他何れも上流の社交界の花形等が案内されたが、ユーゼニーは絶世の美人であり、而も馬に乗る事が非常にうまいものですから、其の仲間に嶄然頭角を抽んで居た。そこでナポレオンは彼嬢が乗つて居られる所の馬と、花束とを嬢に贈りました。其年の十一月にナポレオンは帝位に即き、而して其年も暮れて新年の夜會の時に、餘りナポレオンがユーゼニーを大切にすると云ふもので、愈々嫉妬が盛になつて、或る高官の夫人がユーゼニー嬢に頗る侮辱を加へたと云ふことである。ユーゼニー嬢

馬と花束  
を贈る

侮辱の復  
讐に結婚

は其事をナポレオンに訴へた。所がナポレオンは、イヤ近い中に私が復讐してやると云うて、それから三日の後に、愈々皇帝とユーゼニー嬢の結婚の約束が表面に成立し、一月十九日には其事が堂々と官報で披露された。此の結婚は先づ破天荒の事であります。大ナポレオンなどは自分の戀女房のジョセフィン迄も離婚して、さうして態々奧地利の内親王を皇后に迎へたと云ふやうな風で、誰しも帝王の位に即けば必ず、他國の皇族から縁組すると云ふやうなことをやつたのであるが、ルイ・ナポレオンは皇帝になつて、却て貧乏貴族の娘さんを皇后にしたと云ふことは、實に我も人も意外千萬の事でありました。ナポレオンは官報に、其趣意を辯明して申す様、自分は人民の意思に依つて皇帝になつたのである。自分は自分の由つて來る所のものを忘るゝ譯にはいかない。自分は唯政治上の便宜の爲めに、他國の皇室など、結婚をするよりも、自分の心から愛する所の者を以て、愛情の結婚をする者である。此の婦人即ちユーゼニー嬢は

官報で結  
婚の辯明

非常の時  
の頼み

實に聰明で、泰平の時には自分の相談相手となり、一朝事ある時に於ては、自分の大なる頼みとなる女である、と云ふ意味を告白して居ります。是は誠に其通りであつて、他日事實が、其點に於ては少しも間違ない事を證明しました。

二の註文

結婚の披露は頗る盛大でありましたが、それをする前に、ユーゼニー嬢は其夫たるべきナポレオン三世に對して二つの事をした。其第一は彼を加特力教カトリック教の信者にした事である。是はどの位の程度の信者になつたか、どうもハッキリ分らないが、兎に角教會の門戸を潜らせて、教會で結婚をやつたと云ふこと。第二は巴里の市會からして、結婚の御祝に六十萬法のフランダイヤモンドの裝飾を、新皇后に差上げると云ふ決議をしたのを、其六十萬法の金を慈惠醫院に投じ、之を慈善事業に使ふと云ふことをやしたのである。斯の如く結婚當初からして慈善と云ふことゝ、宗教と云ふことゝ、此二つには歴とした折目を附けて結婚をしたのである。只今迄申上げたやうなことは、當然の事として別に感心も不感

結婚のお  
祝を慈善  
事業に

心もない、然も是から申上げる事が、感心する事と感心しない事と双方あります。併し何處から何處迄は感心する、何處から何處迄は感心しないと云ふやうなことは、貴女方が隨意に御判断下さいまし。

四 ヴクトリヤとユーゼニー

何一つ  
の欠  
点  
ない  
人

皇后は慈善とか、宗教とか、若くは交際社會の支配者となりて、それに安著して居る人ではない。年は若し、美人ではあるし、伶俐ではあるし、何一つ缺點のないやうな人であるからして、其の皇后とられて以來は、宮廷のお賑ひと云ふものは非常なものだ。皇后陛下が斯う云ふ帽子を被られたから吾々も斯う云ふのを被らなければならぬとか、斯う云ふ服を皇后がお著けになつたから斯う云ふやうに、佛蘭西の流行はユーゼニー皇后の一顰一笑、一舉一動で定まつた。又世界の流行と云ふものは巴里で定まる、殆どユーゼニー皇后の一舉一動で世界の流行を左右して居ると云ふ位に、社交上に大勢力があつた。普通の人

世界の流  
行の中心  
人物

なら其位で澤山である。それ以上は餘計な話である。所が皇后はさう云ふことは何とも思はずに、初から自分は政治に没頭して仕舞つた。皇后は總ての物の中に、何よりも政治に興味を持つた。それで兎も角も其の時分、佛蘭西の一番大切な對手は英國である。英國を敵にするか英國を味方にするかと云ふことが一番の問題である。其時分迄はビスマークなども、第二流國の總理大臣位である。何と云うても佛國の向ふに立つのは、英國である。兎に角英吉利は自由國である。言論の自由、集會の自由、其の他總て自由の國である。所がナポレオン三世は不自由で天下を取つた。不自由で取つたと云つても自分一人が自由で、他の者に不自由を與へて天下を取つた。言論を壓制し、志士を縛り、或は放逐して天下を取つた。一般投票とは云ふものゝ、殆んど胡魔化手段で天下を取つた。それだからどうしても英國の輿論が、ナポレオン三世に同情を表すべき理由はない。何處から見てもさう云ふ理由はない。併ながら理由のない事をうま

佛國と英  
國

人間の力

くやると云ふことは、どう云ふ譯かと云へば、それが其人間の力である。若し道理を其儘に押し通すと云ふならば、人間でなくとも出来る。併ながら人間社會の事には、道理は道理、實際は實際と、ちやんと軌道が別になつて行くと云ふやうなことがある。道理はさうだけれどもさうはいかぬと云ふことがある。然るに只今申します通り、ユーゼニー皇后はナポレオン三世と一緒に、夫婦相伴つて英國に行き、英國の宮廷に行つてヴキクトリア女皇のお客さんになつた。

夫妻相稱  
をへて英國  
を訪ふ

是からヴキクトリア女皇の事を一口申しますが、英國の女皇と云ふお方は、御老人になつた顔を御覽になると、誠に柔和なお方で、虫も殺さないやうな顔をしておいでになるお方であるが、中々激しいお方だつたらしい。其激しい事は追々申上げますが、男も逆も及ばないやうな激しい人である。愛憎——好きと嫌ひと云ふことが非常にある人で、好きな事は非常に好きで、嫌ひなことは非常に嫌ひで、人間でもお氣に入る者とお氣に入らぬ者とは、大分差別的待遇が

英國女皇  
の愛憎

ユーゼニー皇后に就て



あつたやうな譯で、同じ總理大臣でも、グラッドストーン杯は餘程お氣に入らない方である。併し其處は流石に立憲君主である。氣に入らぬでも、國民の多數がグラッドストーンを謳歌した時には、矢張りしやう事なしに、まるで藥でも飲んで、當分藥養でもすると云ふ積りで、グラッドストーンを辛抱しておいでになつて、早く止めれば宜いと考へて居られたのでせう。其反對にビーコンスフィールド伯には御親切である、友情が溢る、程濃こまやかであつた。斯く中々どうもむづかしいお方である。所がどうでせうナポレオン三世は、本來大山師の看板を掛けた漢だをのこ。其の皇后が、即ちユーゼニーであるが、是は又舊教の凝り固まり、日本で言へば法華經の凝り固まりと云ふやうな譯である。英國の女皇は英國教會のお頭である、即ち新教のチャキキである。何れの方面から眺めても一致する點は見出されませぬ。殊に女皇のお婿さんのアルバート親王は非常に嚴肅な人であつて、實に几帳面なお方である。所がユーゼニーとナポレオン三

一致點の見出されな  
い主客

親交爾來  
五十年

世が英國に行くや否や、英國の女皇はスツカリ御親友になつて仕舞つた。ちよつとの親友ぢやない、それ以來五十年内外の親友になつて仕舞つた、非常に懇意な仲になつた。それは其時に女皇の書かれたものが残つて居りまするが、實に佛蘭西の皇后と云ふお方は立派な人である、様子が良くて氣取らずに、何とも言はれない交際の仕方、氣持の良いお方であると云ふことを言はれ。其後二年に又た會見せられたが、其時にも我等は如何にも彼女を愛する、我が夫婦—アルバート親王—は、めつたに貴女や皇族方の婦人を賞讃せぬが、彼女にはすつかり参つたと書いてある。英國の民間では、どうもナポレオン三世に非常な反對だけれども、とう／＼ナポレオン三世在位の間は、二人の女の妥協で、英佛同盟は殆ど事實上出來て仕舞つた。ゾット後になつて、ビスマークが普魯西と英國と同盟しやうと云ふことを女皇の方に申込んだけれども、女皇がどうしてもそれを御承知なさらなくて、何處迄も佛蘭西と提携と云ふことになつて

英佛二人の  
同盟

ユーゼニー皇后に就て

仕舞つた。是は國家の大政策からも無論さうでありませうし、又種々な理由もありましたらうが、此の二人の御婦人方の妥協と云ふものが、此の兩大國の妥協になつて仕舞つた。其れが事實に顯はれたのは、御承知の通りクリミア戦争、佛蘭西と英國とが同盟して、土耳其を援けて露西亞とクリミアで戦をしたと云ふことになつた。そのクリミア戦争の時にも、ユーゼニー皇后はナポレオンに向つて、貴方は何を愚圖々々していらつしやる。貴方も戦場に行つておやんなさいと云ふことを頻りに勧めた。それはウクトリア女皇の書かれたものに載つて居る。其の時分ユーゼニーは、非常に夫婦を戦場にやりたがつて勧めたので、貴方の生命は戦場が一番安全だ、戦場に居ると貴方は安心であるが、斯う云ふ所に居ると、何時如何なる厄難に罹るかも知れない、と始終ユーゼニー皇后が言はれた。私は何にも世の中に心配する事はないけれども、私の皇帝が時々ま一人ヒョロ／＼飛出して行くのが心配で堪らない、何時どう云ふことがあ

戰場が  
一番安全

るか分らない、それより外に心配する事はないと云ふことを、英吉利の女皇に話されたと云ふことが、女皇の書かれたものに載つて居る。併しクリミア戦争には勝つたが、ナポレオンは行かなかつた。

五 皇子 生 誕

クリミア戦争が終つて條約調印の二週間前、我が安政三年、千八百五十六年三月十六日に初めて一人の子供が生れた。皇后の政治的煩惱は、此れから一層濃厚になり、猛烈になつた。愈々男のお子さんが一人生れたから、是から先はナポレオン朝廷を守り立て、どうしても其お子さんを皇帝の位に即けなくちやならぬと云ふことが、ユーゼニー皇后の頭の中に湧き出でた。どうしても斯うでも此の子供を皇帝にしなければならぬと云ふことで、一生懸命に其方に骨を折られた。それで千八百五十九年、安政六年に、丁度吉田松陰や其他の志士が殺された其年に、伊太利の戦争がありました。其の時分サルデニアの王様ウキ

子煩惱と  
政治煩惱

ユーゼニー皇后に就て

伊太利統一  
佛伊

クトル・エムマニユルを擁して、カヴール其他の志士が伊太利を統一しやうと云ふことになり、それにはナポレオン三世の力を借らなければならぬと云ふことになり、佛蘭西伊太利の同盟が出来上つた。其時にはナポレオン三世が自ら戦場に出掛けて行きましたから、ユーゼニー皇后は攝政官になつて、自分が留守居をして居つた。所が其時の戦は大變具合が好く行つて、段々勝つて行つて先づ、法王の領地の羅馬迄入り込まうと云ふことになりましたから、ユーゼニー皇后は本來加特力教カトリックの非常な凝り固まりであるから、是は堪らないと思はれて、もう大概にしておよしなさい、其處迄は餘り御加勢が多過ぎると云ふやうなことで、伊太利と佛蘭西との同盟を中途から切上げさせたと云ふ評判がありました。事實如何は姑らく置いて、佛國が伊太利を援ける事が徹底せず、のみならず援けた代りだと云つてニース、其他の土地を伊太利から奪つた杯は、決して佛國の爲めに良策ではなかつた。併し皇后がどれ程迄其の責任者

であつたかは、判然致しませぬ。

六 英佛海峡の一夜

佛戰爭  
と皇后

それから千八百七十年に所謂獨逸との戦になつた。此の佛獨戰爭の原因に就ては中々議論があつて、今でも尙ほ疑問が多い。併し皇后が主戰論者であつたと云ふことは間違はない。皇后はナポレオン三世の末年、或は中年以後には、始終閣議に出られた。ナポレオン三世も皇帝になる迄には随分骨を折つたのであるが、皇帝になつてから段々身體が弱くなつて、少しボンヤリして來た。さうして、する事成す事へまな事はかりやつて、皇后は氣が氣でないものだから、恒に皇帝を叱咤鞭撻叱咤鞭撻と申すと、餘りに露骨であります。兎も角も皇帝を恒に刺戟し、激勵し、鼓舞し、催告した。されどナポレオンは身體は悪し、元氣は無くなるし、皇后の力は段々増して來るし、何でも宜いと云ふやうな風で、「お前好いやうにして呉れ」と云ふやうなことで、印璽でも預けて置くと云ふやうな

ユーゼニー皇后に就て

三世嫌々  
出陣す

風であつたらしい。此の場合も彼の心は餘り戦争には傾かなかつた。彼は其時はもう戦は嫌ひになつてゐた。戦をする勇氣はない、第一身體が悪くて馬にも乗れない位の人で、それをどうでも斯うでも戦を始めて、戰場込追出して、さうして、自分の子供迄砲火の洗禮を受けさせた。それは何の爲かと云へば、戦をして茲に武勳を立て、ナポレオンの朝を堅固不拔のものとして、自分のタツタ一人の子を佛蘭西の皇帝の位に即けたいと云ふのが、山々であつた。

一か八か  
の戦争

有體に云へば、其時若し戦をせずに愚圖々々して居れば、反對黨が起つて、不日にナポレオンの朝が顛覆したかも知れぬ状態であつた。一か八か、一山かけ一戦して見ろと斯う云ふ譯でやつた。それにはどうも女の悲しさで、と云ふべきですが、皆さんの前で失禮になるやうですから、何とか其處は御承知を願はなくちやならぬが——皇后は當時の陸軍大臣から全く瞞だまされておいでになつた。それ程聰明なお方であつたけれども、軍備はスツカリ充實して、獨逸と

遂に國家  
を誤まる

戦をしても、キツト勝つと云ふことの確信もあつたらしい。それは皇后ばかりではない、皇帝も若干あつたでせう、一般の閣員も、且つ「伯林へ伯林へ」と絶叫した國民も、同様であつたでしょう。必らずしも一人皇后のみを咎むる譯には參るまいかと思ふが、但だ皇后が欺かれたのは遂に國家を過とまつた。併ながら過般の世界の大戦争と云ふものは、これが因もとなんです。つまり世界の變局は、千八百七十一年の獨佛講和條約から胚胎したる禍機わざの發展であり、其の結果が世界大戦争であります。故にユーゼニーと云ふお方は、世界大戦争の張本人と云つても宜い。此の獨佛戦争の話は何でもない。唯戦を始めて直きに敗けたと云ふだけの事である。早速負けて仕舞つた。皇帝や皇太子は千八百七十年の七月廿八日に、サンクトールの停車場から戦に出掛けた。皇后は早く凱旋をお待ち申すと云つて、希望の光を以て送り出された。さうすると、もう九月の初には、ナポレオンが降參して、獨逸軍の捕虜となつた。其の電報が來たものですから、

急轉直下

ユーゼニー皇后に就て

能迄攝政  
を辭せぬ

佛蘭西は大騒ぎなのです。さうして皆が皇后陛下に向つて、貴女は攝政などと云ふやうなことをしてお出でになる時ぢやない、貴女の皇帝はもう既に捕虜になられた、早く攝政をお止しなさいと斯う言つた所が、中々以て何處迄も強情なお方で、私は皇帝から攝政を命せられたのであるから、皇帝から取消すと云ふ御話がない以上は、之を廢むる譯にはいかない、とて一切聞入れなかつた。併し時勢は小車の轉ずる如く、遂に革命が起り、共和政府の宣言が出で來つた。もう皇后も仕方がない、左右を見れば誰も逃げて仕舞つたと云ふやうな譯である。そこで流石の皇后も堪らないから逃げやうと云ふことになつた。中々逃げ方もうまい。どうして逃げられたかと云へば、亞米利加の齒醫者で「エバン」<sup>ス</sup>と云ふ人の所に駆け込んだ。エバン<sup>ス</sup>と云ふ齒醫者が、うまくやつたのである。病人を連れて國に歸ると云ふことで、早速旅行券を持つて來て、さうして皇后陛下を自分の乗用の馬車に乗せ、自分も乗つて海岸に駈附けた。それが九

佛國を逃  
出す

醫官の搜  
索を免る

月三日の正午です。サー・ジョン・ブルゴンと云ふ英國の紳士が其處に船遊びに來て船を持つてゐた。其船と云つても大きな船ぢやない、僅かに四十二噸の船です。さうして齒醫者さんが事情を打明けて、實は斯くくの次第であるから、どうか連れて行つて戴きたいと申した。さうすると其の紳士が委細承知した。併ながらどうか今夜の十二時迄は此舟に乗る事はお斷りする、十二時後に來て下さいと云うた。案の如く十一時頃佛蘭西の憲兵とか巡查とか云ふものが舟の中來て、此の中に誰か居ないかと搜索したが、誰も居らぬので少時<sup>しばらく</sup>して歸つた。其後から皇后が乗り込んで出帆した。所が悪い時には悪いものでありまして、其晩の暴れ方と云ふものは非常な暴れ方です。英佛海峽は穩かな時が普通の海の暴れ方なんです、況んやそれが暴れるのだから逆も想像が附かない。餘程暴れたのである。皇后はまア好い按排に暴れて呉れて幸だ、どうか此船が顛覆して呉れれば、自分は是程宜い事はない、どうぞして顛覆して貰ひたい、

ユーゼニ―皇后に就て

衷心切に  
船の顛覆  
を祈る

さうすれば心配も何もない。一生の終りで一番安心だと、切に船の顛覆を祈つて居つたらしい。所が其願も叶はず、更らに陸に著いた。茲にユーゼニー皇后の新しい生涯が始つたと云ふやうな譯で、此時船が引っくり返つて仕舞へば、皇后の生涯も終り、私の話もそれで済むのですが、不幸にして船が著いたものだから、是から又少し私の話も続けなければならぬ必要がある。是迄は餘り感心はしない、感心する事は是からであります。感心すると云つても澤山ぢやない、極めて少ない事ですけども、私は非常に感心をして居る譯である。

七 阿弗利加の慘事

皇后の新  
生涯

ユーゼニー皇后は無事英國に上陸しました。併し皇帝は敵國に捕虜になつて、而も戦の前から病人であるから、捕虜になつてからも病氣をして居ると云ふ譯です。其處で又夫婦の病氣を獨逸迄見舞に行き、自分の命とも思つた息子さんも戰場から歸つて來たので、親子二人で英國に暮して居る。即ち巴里と倫敦の眞

中道位のチスルハアストと云ふ處に家を拵へて、其處にお母さんと子供と二人で暮して、さうして千八百七十二年の三月にナポレオン三世も、獨逸の方から釋放せられて、其處で又親子夫婦が出遭つたと云ふやうなことになつて居る。どうも其時には昔の見る影もなかつたのでありませうが、流石に英國の女皇陛下は、皇后が逃亡して來た年に、元の親友であつたユーゼニー皇后を訪ねて、相變らず對等の待遇をして交際をされたのである。それから息子さんは、其年の十月からグリニツチの兵學校に入つて、一生懸命に勉強をする。さうしてナポレオン三世の身體は段々悪くなつて、癌を病んで千八百七十三年の一月九日に死んで仕舞つた。で皇后はもう夫婦も死ぬるし、残る者は自分の子一人であつて、其お子さんをどうでも斯うでも守り立て、此人を偉い人に爲して、天下に愈よの事有る時に於ては、再び佛蘭西の帝位に就けやうと、一生懸命に骨折られた。其お子さんが年と共に學業も進み、立派な砲兵士官に爲られた。さう

那翁三世  
の死

ズールー  
遠征

すると一千八百七十九年に、其屬して居られた所の隊が、阿弗利加の蕃人のズールー、是は非常に獷猛な蕃人で、始終手槍を投げて、人を殺す事のうまい蕃人である。中々臺灣の生蕃も三舍を避けるやうな奴である——を征伐に出掛けたのであるが、息子さんも是非それに就て出征をしたいと云ふことになつた。英國政府ではそれは近頃迷惑な事である。若し萬一の事でもあつては飛んでもない事であるから、強つてお断りをした。さうするとお母さんが遂に女皇に、どうでも斯うでも私の子供をやつて戴きたいと云ふことを運動された。是はどう云ふ譯かと云へば、可愛い子には旅をさせろと云ふのでもありません。もうちつと進んで言へば、其處で戦を味はせて、武功を立てさせて、段々子供さんに箔を付けてやらうと云ふのでもあらうし、まさか可愛い子を砂漠の中に埋めやうと云ふ積りぢやなかつた。所がそれが出征をして千八百七十九年六月一日と云ふに、蕃人の投槍に刺貫れて死んで仕舞つた。斯う云ふ譯である。是は實に

愛兒の死

死骸を拾  
ひに阿弗  
利加へ

彼女に取つては容易ならぬ打撃である。何の爲めに戦にやつたか、もう少し進んで云へば、何の爲めに獨逸と戦をしたか、何の爲めに耻を忍んで是迄來られたか、唯此の子有るが爲めである。唯だ此子を守り立てたい計りに戦場にやつたのだ。然るにそれが死んで仕舞つては、とても堪つたものではない。御當人の堪らない事は勿論、皆さんも御同様だらうと思ふ。併しどうも死んだ者は仕方がない。死んで仕舞つて其事を聞いたユーゼニーは、態々其子供の死骸を拾ひに阿弗利加まで出かけて、とうとう其死骸を持つて來て、遂に自分の夫婦と自分の子供の墓をば、フアルンボルローに造られたのである。當時阿弗利加に向ふと云ふことは、今日のやうに一等の汽車の寢臺に乗つて行くとか何とか云ふ譯ぢやない、随分骨を折つたのである、随分苦しかつたに相違はない。併しとうとう戦死者の骨を拾うて歸つて來られた譯であつたのである。此事に就ては英國政府も餘程弱つた。デズレリーの傳が近頃出まして、其傳の中に其事が書

ユーゼニー皇后に就て

世にも名  
高き片意  
地な二女

いてある。ソールスベリー卿がヂスレリーに手紙をやつて、あの子供の死んだと云ふことに就ては、實に御同様責任はないのである。お互に其出征を許したと云ふ覺は毛頭御座らぬ。けれども世にも名高き片意地な二人の女性達が、勝手次第に定めてやつたことで、俺共の手の附け様はなかつたのである。實に困つたことであると云ふ手紙が掲げてあります。今も申上げた通り、ユーゼニー皇后が、英國の女皇陛下は運動して、二人で定めて仕舞つて、其子をやつて仕舞つた。死んでから英國の内閣も、殆ど其斷りの言ひ様がない。

八 九十五年の生涯

生甲斐の  
ない長生

そこでユーゼニー皇后も段々年を取つて行かれた。此位の所で皇后は死んで澤山だ、もう宜からうとでも言ひたいやうな氣持がする。芝居で云へば五幕濟んだので、此上幕の出し様がない。所が又どの位強情ツ張りであるか、どの位意地悪であるか、どの位腹黒であるか、女と云ふものは、どの位氣性の強いもの

であるか、今年の七月の十二日、即ち數へ年の九十五になる迄達者で居られた。鐵で造つた腸でも、熱を加へれば解けて仕舞ふのである。金剛石で造つた心でも、矢張り磨く物があれば磨け、削る物があれば削れるのである。然るに此の世界第一の——多分さうでせう、少なくとも世界に有名な美人のユーゼニー皇后と云ふ人の心腸は、一體何で拵へたのであるか、解剖でもして見たいやうな氣持がするのである。實に偉い方で相變らず生きて居られた。生きて居られたのみならず、自分は何等世の中の事は頓着ないやうな風をして居りながら、總て世の中の事を知つて居られた。年を取られてからは、冬は地中海の海岸の別荘に住はれたのでありますが、或時に巴里を經由して、宿屋の二階から見ると、元の皇宮の庭が手に取るやうに見えたのである。さうすると腰元が、あの所は嘗て陛下——其時陛下と云つたか何と云つたか知らぬが——が居られた所でございませうが、嘸御追懷なさるだらうと云ふやうなことを言つたら、平氣なも

巴里の故  
宮を見て



ので、イヤ其時の女性はもう千八百七十年に死んで仕舞つたのである。死んだ者は何を見ても差支ないと、斯う言つて居られた。即ち自分が皇后としての立場と云ふものは、千八百七十年に消えて仕舞つて、それから先は別物として居られた。併ながら流石に其のお方も、息子さんの話だけは禁物であつた。息子さんの話をする時には、どうもやり切れないと云ふ譯であつた。其死んだ子供の話だけは禁物であつたと云ふことが書いてありますが、人間である以上は、其位の除外例はあつて然るべきことであらうと思ふのである。

息子の話は禁物

自宅を開放して病院に

一八七〇年以來の喜び

今度の戦の時には、自分の英國の宅は解放して病院にして、聯合軍の兵隊を收容して、頗る其爲には骨を折つて居られたやうであります。而して千九百十八年十一月十一日午前十一時、世界大戦最終の號砲が發射せらるゝや、彼女の崇信したる教師は彼女を見舞うて平和克復の祝辭を申した。彼女は誠に堪り兼ねたる愉快なる様子で、千八百七十年以來、未だ曾て今日の如き喜ばしき日はないと申された。

偉らい點

愚痴を言はぬ人

皇后は實に偉い御方であつた。何が偉いと云へば、其の意志の鞏固な事であり、其の思切りの善き事であり、且つ其の克己の精神の徹底した事であります。如何なる偉き人物でも、一度其の位置を失へば、必らず愚痴を滾す様になり、天を怨み人を咎め、我が胸中の不平不満をば、四方八方に當り散らすものであります。大奈翁やビスマークの如き人さへも其通りであつて、彼等の末路は實に蕭條たるのみならず、頗る見苦しくありました。然るにユーゼニー皇后は、第二帝政没落に關する一切の責任を、我が肩上に引き受け、あらゆる非難攻撃、讒誣悪口の衝に立ち、其の手元にはあり餘る資料を有しながら、未だ曾て五十年の間、一度も口を開いて之を辯疏せようとはしなかつた。此れは決して能はざるにあらず、爲さざる也でありました。此の五十年間自から濡衣を乾さぬ態度は、實に見上げたものであります。此の一點に於ては、殆んど比類なき立派なる御方

能はざるに非ざる也

と申しても差支ありません。

活々した  
其の見識

さりとして皇后は世の中と全く離隔したかと云ふに、決して左様ではなかつた。九十五歳の末期迄、最も深甚なる興味を以て接觸し、觀察せられた。如何に其の見識が活々して居たかは、平和條約調印の際皇后がクレマンソーの政治的生活も此れで終つたと申されたので判ります。當時クレマンソーは佛國第一人たるのみならず、殆んど唯一人で、誰しも次の大統領は必らず彼であらうと豫期して居ました。然るに皇后の炯眼なる、早くも未然を洞見せられました。一事が萬事で、何事も此の調子でありました。又た日新の文藝、日新の政治問題、日新の人物、あらゆる社會に徂徠する百般の事件は、一として其の機敏にして雄健なる注意から外れません。而して最後迄活動を愛し、日光や山岳や海濤や旅行や、凡そ天地萬有と接觸するの興味は、老て愈よ濃厚に赴いたと云ふも過言ではありませんでした。然し何時も若き者が好きであつて、老人の嫌

老人嫌ひ

言杯は甚だ嫌ひでありました。而して一生喪服をつけながらも、自から婦人たるの嗜みを忘れず、其の衣服の著こなし方や、其の化粧杯は最後まで完全無缺と申す迄に注意せられました。寔に何と申して宜しきやら、珍らしき御方であります。御自身の生活は最奇の小説よりも最奇でありながら、然も御當人は全く平正なる現實の中に生活し、五十年間日影の身として、依然皇后であつた氣象と見識とを持って、然も其の現境に適應して、何等の差障もなく、平氣で暮らして居られました。實に御婦人方は申上ぐる迄もなく、如何なる男子でも其の眞似は出来兼ねます。尙ほ此からヴェクトリア女皇に付て申上たい事が残つて居ますが、餘りに時間を取りますから、次の會に譲ることと致します。長々御靜聽を煩はしました。(大正九年十月)

男子も及  
ばぬ女

撼樹蚍蜉自覺狂。

書生技癢愛論量。

老來留得詩千首。

却被何人校短長。

第二人物隨錄

蘇峰學人

## 野田大塊翁

### 一 緒 言

生前の約  
故人に就いては、色々な思ひ出がありますけれども、其中で最も強く感ずる事は、曾て故人と面會した折に、私が、「君が死んだら、俺が必ず何か一言云ふ積りである」と言ふと、故人は、「俺の前に君が死んでも、俺は何も言ふ事は出来ない」と言はれたので、私は、「それぢや、俺の前に死んだらよからう」と言うた事がありますが、其の約束が事實になつたことでもあります。即ち今日私が諸君の前で其の約束を果す事の出来る事は、私にとつては光榮の至りでありますし、故人にとつても亦た、満足の事と思ひますから、私が故人に就いて一言述べるところを聞いて戴き度いと思ひます。

故人を批評するに非ず

今日は故人を批評するものではありません。——批評と云ふ事は、其人に就いて、善いこと悪いことを論ずる事でありませぬ——故人を追悼するのであります。追悼と云ふ事は、故人の徳を頌する事を意味するのであります。然し徳でない事を徳として頌する事は、悪い事でありませぬ。殊に故人は生前世人より、御世辭を言はれる事を嫌ひましたし、死後とてもお世辭を言はれる事を嫌ふ事と思ひますから、今日は故人が聞いてゐる積りでお話しを致します。

維新の風雲

故人は實に維新の風雲によつて生み出された偉人でありませぬ。維新とは格式や門閥等によつて、總べて世の中を小さい心の型にはめ込んでしまつた長い間の因習を打破して、格式もなく、門閥もなく、唯だ其の實力によつて誰れでも登用される——即ち人材登用の實を擧げられた時であります。此の時に故人は生れたのであります。英國の諺に、「貴族は銀の匙をくはへて生れてくる」と言ふことがあります。故人は鐵の匙も陶器の匙もくはへて來ず、唯だ身體一つ

力士の如き體軀

で生れ出たのであります。昔の人がよく「何にも心配はいらぬが、身體のないのが何より心配だ。身體さへあれば何んでも出来る」と言うて居りますが、故人は即ち銀の匙の代りに堂々たる身體を以て生れ出たのであります。嘗て勝海舟先生に面會した時、「君はなせ力士にならなかつた乎」と、冗談言はれた程の身體、即ち天爵を以て生れたのであります。實際力士になつたら常陸山位にはなつたかも知れませぬ。故人を一度見た者は、誰れでも忘れる事は出来なかつたのであります。故人は如何なる時でも、如何なる場合でも、其の巨大な天爵によつて見出されたのであります。此の天爵は故人にとつて實に利益であつた。世の中は昔から「獨活の大木」と言ふ様に、大きいばかりが能ではない。然し故人は大きい身體を最も有効に、大きい程の働きを爲したのであります。

難得き天爵

二 翁の經歷

故人の履歷に就いては、國士館が編纂された、『野田大塊翁略傳』に盡されてゐ

自由民権  
主義の運  
動に盡力

ますから、此處では略しますが、唯だ二つ三つお話し致したいと思ひます。故人は明治十年から二十年に於ける、自由民権主義の大運動に、率先して盡力致しました。此の運動は、今日諸君の想像以上に眞剣なものでありました。故人の故郷は福岡縣三池郡であつたが、故人は福岡縣の外に、一方熊本縣にも跨がつて運動し、又た兩縣から推されて先輩たり、首領たるの觀がありました。御承知の如く三池郡には鑛山があります。而して此の鑛山は三井家で經營してゐました故に、故人と三井家との關係が生れました。三井家が故人に恩になつたか、故人が三井家に恩になつたかは問題でないが、然し私は故人が三井家に多大の貢獻をなした事は、確實であつた事を、申し上げたいのであります。此の多大なる貢獻は、小にすれば三井家の爲め、郷里の爲めであり、大にすれば國家の爲めでありました。

實際論

故人は空理空論でなくて、實際に行ひ得る事實を叫んだ。即ち言行一致を目的

家翁と三井

一つの特  
色

としました。而して一方に於ては、自由民権を主張して、他方に於ては、地方經濟の増進に努力する事を忘れなかつた。そして其の仕事が大きくなるに連れて、故人は漸次中央舞臺へ乗り出した。中央舞臺へ乗り出してから、故人に就いて一つ見逃す事の出来ない事があります。それは故人は如何なる場合でも、決して駈足をした事がなかつた。常に普通の歩調で歩いたのであります。其の代りに他人が晝寝してゐる場合でも、決して寝ないで歩いてゐたのであります。敢へて急がず、敢へて休息せず、而して地方の人物が中央の人物、天下の人物にまですべきついたのであります。即ち最大の出世を、最小の歩みで贏ち得たのであります。人が自分の前方に居る場合は、決して其の人を押しのける様な事をせず、人は人、我は我と云ふ式で、決して競争しなかつた事が、故人の特長であつた。故人の歩いた道を考ふれば、水至つて溝なると云ふ風で、何事も自然に出來て、何一つ、不自然な無理がなかつたのであります。それで故人が明治三

自ら賣ら  
んと力め

十一年に代議士になつた時も、決して自分から競望したのではなかつた。是非野田を出して貰ひたいと云ふ中央大政治家の希望と、是非出したいと云ふ故郷の人々の熱望から、選出されたのであります。故人は、出せば出る、出さねば出ぬと云ふ態度で、即ち水至つて溝なると云ふ自然の形であつた。

君の傳は  
即ち國家  
の歴史

故人が一度政界に乗り出してから、伊藤、井上、西園寺、桂公等の間に於て盡力した事は、一方に於て政黨の歴史であり、一方に於て國家の歴史でありますから、故人の歴史としては述べません。併し故人は、世人の言ふ通り、只單に妥協のみの人ではなかつた。故人は勇者であつた。戦ふべき場合には飽までも戦つた。其の例を言ふと、第一に明治二十一年後藤象二郎伯と大同團結の問題で戦つた。第二には明治二十五年時の内務大臣品川彌二郎子と選舉干渉問題で戦つた。第三には桂内閣に對し憲政擁護運動の爲めに戦つた。而して此等の戦ひの對手は、何れも故人とは親密の間柄であつた。然かも戦ふ可き理由の下には、

勇者

著者との  
衝突

堂々と戦つたのである。故に握手政策、即ち妥協政策の人とのみ言ふのは間違ひである。其の妥協し握手する場合には、必ず握手するだけの理由を持つてゐたのであります。自分の事を言ふのは、嗚呼がましいことであるが、私も故人とは四十年間も交際しました。私も多くの友人はありますが、徳富と呼び捨てにされる程の親しみをもつた友は、故人のみでした。實際故人は私にとつて再び得られぬ親友であつた。然しそれ程親しい間でも、政治上の意見では時々衝突してゐました。然し其の都度、「永久的な衝突ではないから、何時か又た何處かの曲り角で會ふ事もあらう」と言つては、別れてゐましたが、晩年に至つて衝突する事が非常に少なくなつた事は、何より嬉しい事でした。

### 三 翁 の 特 色

故人に就いては、二つの場合がありました。即ち其の一つは故人は如何なる逆境に遭遇しても、必ず之を順境にする能力を持つてゐた。其の例は丁度伊藤

逆境を脱  
する人

公が明治卅三年の春、政友會組織以前、故人を最も必要とした時に、故人は大阪にゐたが、其の際、故人が専務をして居た三池の紡績會社の支店長が失敗して、故人の身體が抜きさし出来ない破目に陥つた事がある。故人にとつては非常な打撃であつた。然かも其の打撃を作つた人は、私が紹介してやつた人であつたのですが、故人は此の大打撃にめげず、全責任を自分で背負ひ、九州には歸らず、直ちに東奔西走の大活動を始めて、其の窮境を切り抜け得たのであります。此の時は實際體量が五貫目も減つたと言ふ事です。「艱難汝を玉にす」といふ諺は、實際故人に於て之を味ふ事が出来ると思ひます。故人は又た此の時に大いに志を立てたと言つてゐました。

愚痴を洩  
さす  
今一つは、故人は如何なる時にも、決して愚痴を洩さなかつた事であります。其の例は丁度大隈内閣成立の時、餘儀ない事情——井上侯に對する義理であつたが——から暫らく政界を離れて、京城に隱遁生活を送らねばならなかつた。

然し其の時でも故人は、

天下取る子は大の字の晝寢かな

と言ふ俳句を作つた程で、些の不平も愚痴も洩さなかつたのであります。此の句は、實は私と故人との合作であります。と云うて、私は此處でその版權を争ふものではありません。天下が故人を必要とする場合に、故人が京城に悠々閑日月を送つてゐるのに對して、私が同情したのであります。實際政界多端の時、悠々と京城に引込んで、晝寢をしたり、發句を作つたり、蘭を書いたりしてゐる事は、常人には出来ない事であるが、この間に愚痴一つこぼさなかつた辛抱が、故人にとつては、他日非常な利益になつたのであります。即ち世人に敬はれる素となつたのであります。

人間學の  
大博士

私は故人の學問に就いては、深く述べないが、然し世人が申さるゝ以上の學者であつた。世間の相場といふものは、高く買ふときは高く買ひすぎ、低く買ふ



時は低く買ひさげる嫌ひがあるが、然し故人はよく物事を知つてゐたし、又た新知識を得る事に努めてゐた。學者と云ふ程ではなかつたかも知れぬが、決して無學者ではなかつた。然し人間學にかけては、實に大博士であつた。人間學の事に就いては、何を持ち込んでも、ピクともせず、又た何人に對しても、ヒケはとらなかつた。これは故人の特色であつた。

故人は實際妥協の巧者であつた。而して故人は其の妥協に於て、損をした事はなかつた。それで何事も野田へ〜と云つて期待されたのであつた。西園寺公が興津の清見寺の和尚に、「自分が政友會總裁の時は、いろ〜野田に遣つて貰つたことがあるが、曾て期待に背いたことはなかつた」と、話されたと云ふ事を和尚から聞いたが、之は所謂の使して君命を辱かしめざるものであつて、あやにく故人の耳に入れる事が出来なかつたから、此處で諸君にお傳へしておきます。此の如く故人が、何故に絶對的の信用を得た乎といふ原因は、第一に何事でもや

妥協の巧者

らせれば、必らずやると云ふ手腕があつた事、第二は秘密の嚴守者であつた事、第三は如何なる場合にも報酬を欲しなかつた事である。報酬を望まず、秘密を守り、而して何事でも必らず解決すると云ふ三拍子が、即ち何事も野田へ〜と期待さるゝ原因となつたのであります。

協力一致の  
人

又た故人は同輩と非常に仲好く協力一致した。それは故人は決して同輩と一番槍を争ふと云ふ如き事をしなかつたからである。團體事業の根本を吞込んでゐて、何時も團體の利益を先きにして如何なる場合でも、同輩同士と手を握つて行つたからである。故人は又た後輩に非常に好かれた。それは、故人は後輩を愛して、色々な世話を吝しまずよく引立てゝやり、然かも無闇に干渉をしなかつたからである。是は或は故人自身が、井上侯あたりから、あまり可愛がられ過ぎて、難有迷惑を感じた經驗からであつたかも知れぬが、兎に角、是が後輩を近づけた所以であつたのであります。

豊かなる  
人間味

故人に就いては、未だ色々話したい事がありますが、時間がありませんから略しますが、然し唯一事付け加へて置きたい事は、故人とても決して完全無缺の人ではなかつた。昔の言に、「缺點を以て世につながる」と言ふ事があるが、故人も又た缺點は持ち合してゐた。然し故人は人間味が豊かであつたから却つて世人に愛されました。故人も自分から昂ぶつたなら、或は世人から愛されなかつたかも知れませんが、故人は決してそんな事はありませんでした。

缺點は成  
功の一因

嘗て故人が大臣に推されようとしてゐた折に、或人が「大臣にならるれば、何の椅子に坐られます乎」と訊いた時、故人は何も言はずに電燈の笠をたゞいで、一笑したと言ふ事です。故人としては不似合の事かも知れぬが、それが却つて賞められたのであります。世人は大抵其の失策やら失敗やらで、人に笑はれるものですが、然し故人は、其の失策やら失敗やらの爲めに、却つて人望を得たのであります。缺點の多かつたのが、却つて人に喜ばれ、而して成功の一

つの原因となつたのであります。

故人の蘭

今日故人の書いた下手な蘭が、丸の内邊りで高く賣れると云ふ事ですが、實際徳の力と云ふものは、恐るべきものです。こんな事なら、私も故人の生前澤山書いて貰つて置けば、今頃は財産家になつてゐたのに、惜しい事をしました。

偽者に非  
ず

餘談はあいて、實際人間の眞偽と云ふものは、其の人の生死の場合に於て分るものであります。故人は其の生死の場合に置いて、偽者でなかつた事が證明されたのであります。

#### 四 身は國家に許す

故人は死前、先帝の御惱み重らせらるゝと聞いて、自身の危険な病體をも顧みず、直ちに葉山へ伺候しました。又た議會へ出席しました。尙ほ又た我が國士館の爲めに頭山滿翁と共に飛鳥山の澁澤翁邸に行き、朝の九時から午後の三時まで六時間許りの長時間を、國士館大學創設に就いて、非常に盡力しました。

病を忘れ  
て國事に  
奔走す

然かも自家の事に就いては、一言も及ばなかつたといふ事實は、眞に故人の眞價を發揮したものと信じます。死を眼前に迎へ乍ら、而も自家遺族の前途を顧みず、國士館の前途、否、大日本帝國の前途を憂へてやまずと云ふ事は、常人の到底眞似の出来ない所であります。

立派な臨終

丁度二月二十二日、私は危篤の報に接して、直ちに世田谷の邸にかけつけた。そして親族や、醫師の許しを得て、國士館同志の總代として、「國士館の前途の見込みは付いた、心配はいらぬ」と言ふと、故人は其の言葉が解つたとも解らなかつたとも此處では申しませぬが、ニッコリとして、息を引取つたのであります。故人は大きな身體を持つては居たが、無智でもなく、魯鈍でもなく、非常に機敏で鋭敏で、又た神経質な所もあつたが、兎に角、身體が大きいだけに、其の心も又た大きかつたのである。私は明治大正に於ける歴史的人物の一人として、故人を數へる事を憚らないのであります。

(昭和二年三月二十二日、國士館に於ける野田大塊翁追悼會席上にて)

正三位勳一等野田卯太郎君墓誌

君通稱卯太郎號大塊嘉永六年十一月二十一日生於筑后國三池郡岩田村少壯行販自給餘力修學讀書身在畎畝之中而立志不凡明治十六稔當選村會議員十九年福岡縣會議員又爲三池銀行支配人夙與同志唱自由民權說奔走遊說君名噴々于鎮西志士之間矣二十二年爲三池紡績取締役二十四年大日本綿絲紡績聯合會委員周旋上國君名漸聞三十一年當選衆議院議員君通政情觀大局是以廟廊巨公與民間黨魁及紳商等交諮謀君推誠展力居中盡心桂園兩閣之際政府政黨一切交涉隱然處理蓋君勞居多焉四十二年巡遊歐米大正二年爲東洋拓殖會社副總裁七年任遞信大臣九年叙勳一等授旭日大綬章十四年更任商工大臣兼政友會副總裁無幾罹篤疾後稍間大正十五稔十二月先帝大漸君冒病伺候葉山昭和二年一月有重要議事參議院二月二十三日薨於世田谷無爲庵享壽七十五特旨叙正三位君軀幹魁偉風采樸樸一見知不尋常人也氣宇開豁接人款然是以交道最廣而中自縝密藏機略又參禪矯性克己功夫熟矣自奉甚薄恬淡無慾而憊々于君國終始不渝易簀之際一言不及私庶乎有國士之風

昭和二年三月一日

友人

蘇峰德富正敬撰併書

### 人傑 山縣公

私は只今山縣公關係の方々から、依頼を受けて、山縣公の傳記を編してゐます。既に一千頁ばかりのものは出来ましたが、少くとも今二千頁ばかりのものが出来るには、今後二箇年を要することゝ存じます。されば委しきことは、その時まで待つていたゞきたい。併し折角のお言葉でありますから、大擧みに申上げます。

\* \* \* \* \*

日本の誇

兎も角も山縣公は、我が日本の誇りとすべき人物の一であります。其の功業から申しても、その人格から申しましても、確かに歴史上に其の一位を占め、且つ占むべき一人でありました。若し公が明治戊辰以前に死したとしても、尙ほ立派なる維新の志士であり、吉田松陰先生門下の一人たるに忤ぢませぬ。然も

公は、明治の御代から、大正の御代にまで御奉公をいたしました。先づその主なる功業を數へますれば、全國に徴兵令を布き、古の武門武士なるものを、根柢より一掃して、全國民平等に兵役の義務——若しくは權利——を負擔せしむることゝしました。現在の自治制度も、亦た公の提唱によりて實行せらるゝことゝなりました。これには獨逸の制度を翻譯的に採用したとの論もあつたが、大體に於ては、實に難有き施爲であります。

\* \* \* \* \*

公の武勳 戊辰の役には、公は越後口に於て戦うた。明治十年西南の役は勿論、二十七八年日清戦役、三十三年北清團匪事件、三十七八年日露戦役、何れも公一人の力ではないが、公はその勢力者中の主なる一人でありました。就中三十七八年戦役には、その前後を通じて、公は尤も苦心せられました。

\* \* \* \* \*

同じく文勳

外交上に於ては、日露協商には、自ら露國に赴いて、直接その事に任じ、日英同盟には、元老として、當時の桂首相、小村外相を支持し、これを實行せしめました。公は、第一次山縣内閣の首班として、明治二十三年第一帝國議會に臨んだ。第二次山縣内閣の首班として、始めて政黨と妥協政治を行つた。その施設は、今此處に枚擧しないが、何れも難局を能く整理し、能く拾收したことは鮮かなものでありました。

文勳武勳に勝る

公は恒に自ら一介の武弁と言つたが、それは餘りに謙遜の言葉にして、公の文勳は、却てその本職たる武勳に超ゆるも、下ることはあるまいと思はれます。

門下雲の如し

公は能く士を愛し、後進を引き立てた。公は決して藩閥者流でなく、凡有る賢才を、凡有る方面に求めた。されば公の門下に集る人材は、實に雲の如く多く

ありました。

多趣味なる人

公は實に多趣味であつた。槍術は天下一品と云はざるも、自ら誇りとしたる一であつた。繪畫も描けば、書も出来る。詩も作れば和歌も詠ずる。而して和歌は珍らしく専門家以外の作者として、一頭地を抽んでゝをられた。謠曲、仕舞なども、中々隅にはおけなかつた。而して市井に持てはやさるゝ俗曲なども、能く愛賞せられた。

公の半面

公は一見謹嚴その物の如くであつたが、その燕居の際には、極めて碎けて、極めて打解けて、人間享樂の方面にも、能く行き涉りてゐたと申すことであります。これは私の親しく知るところではないが、決して間違ひないと信じます。

風流の道  
に精通す

公は、極めて儉素、質實であつたが、風流の道には、尤も精通してゐた。特に築庭などは、その趣味多く、且つ高く、京都の無鄰庵、東京の椿山莊、新椿山莊、小田原の古稀庵など、何れも自らの設計、自らの意匠によるものが多かつたさうです。

\* \* \* \* \*

公の忠誠

公は、維新以前の勤王家にして、其の皇室に對する忠誠は、他人の想像の及ぶところではなかつた。其の爲めには、一身を何時でも犠牲とするを顧慮しなかつた。されば平生謹厚にして、自ら抑損したが、事苟くも皇室に關すれば、直言憚るところなかつたやうであります。而して憂國の至誠は、老いて愈々旺んに、食料問題、思想問題、教育問題などにも晩年には、屢々その心思を勞し、その意見を披陳せられた。

\* \* \* \* \*

家康型の  
偉人

一言にして申せば、公は太閤秀吉型でなく、寧ろ徳川家康型であつた。併し家康程の厭味はなく、家康程の腹黒でもありません。併し老いて學を好み、愈々進んで已まざる氣分は、前に家康あり、後に公ありとでも申して差支ありますまい。公は死に抵るまで、新奇なる知識の吸収に、其の全力を竭されました。以上は、ほんの思ひつきのまゝ、御参考までに申し上げます。何卒私の公式傳記の出來たる後、委細は御承知くだされんことを願ひます。(昭和五年三月十四日)

## 桂公と帝國主義

### 一 日本と帝國主義

桂公と東洋協會

桂公の忌日である其の前日に於て、桂公が曾て會頭として其の成立發展に力を假されたる東洋協會の講演會に於て、十數年公の知遇を辱くしたる予が、演説をするといふことは、寔に不思議の因縁と言はねばならぬ。そこで予は、『桂公と帝國主義』といふ演題を選んだのである。そは帝國主義は、桂公の一生の大本領にして、東洋協會存立の理由も亦た此の主義を擴充するの目的に他ならぬからである。

\* \* \* \* \*

帝國主義とは古き

抑々帝國主義は新らしき名目であるが、事實は最も古き事實である。即ち、『古

事實

事記』にもある、『日本書紀』にもある、『祝詞』にもある。神武天皇が都を橿原に奠め給うた時の勅にも、『六合を兼ね八紘を家とする』といふ言葉がある。祈年祭の宣詞にも、『狹國は廣く、峻國は平けく、又た遠國は八十綱かけて引き寄する如く』といふ言葉もある。是等は皆な我が帝國の開基以來の建國の意義を説明したものである。帝國主義が維新以來外國より輸入されたるものであると思ふが如きは、實に帝國の歴史を無視する亂暴なる愚論と言はねばならぬ。近くは維新大改革の如きも、畢竟此の帝國主義を實行するが爲めに行はれたるものである。帝國の政權が朝廷と將軍との間に分割せられ、又た三百諸侯に細分せられ、國勢の統一を見ることが出来ぬ場合に於ては、到底對外政策は行はれぬものである。そこで茲に、皇室を中心とし、日本上下の心を一にし、世界に向つて大いに經綸を行はんが爲めに、維新の改革は出で來つたものである。されば、その改革の先登者、吉田松陰、橋本左内の如きは、恰も我々が今日言ふ可きところのこと

を當時に於て言うて居るのである。滿蒙經略論の如きは、安政元年、吉田松陰が説いて居る。又た南洋發展の如きも同様である。日露同盟論に至つては、既に安政四年に橋本左内が説いて居る。何れも、約六十年前に彼等は、今日我等が唱ふるところの議論を唱へて居るのである。是を見ても、帝國主義が、左程珍しきもので無いことが分る。

\*

\*

\*

\*

\*

\*

征韓論と  
非征韓論

ところが、明治六年の征韓論の破裂からして、日本の政界には自から二箇の潮流が生じたのである。西郷南洲を中心としたる征韓派は、先づ大陸に向つて力を延べ、國民の外に向ふ活動によつて、自から内部の改革も刺戟す可しといふ議論である。ところが、岩倉、大久保、木戸を中心とする内治派は、先づ脚下から踏み固め、然る後外に及ばねばならぬといふ論である。今から考へて見れば、何れも一理ある論であつたが、此の意見の衝突の結果、遂に十年の役を惹起し

目的は一  
つ

たといふことは、必ずしも其の原因が悉く皆、是れに由來するといふ譯でも無からうが、實は笑止千萬の次第である。斯く、内治、外展の二派に分れたといふも、畢竟は手段の相違であつて、目的は一である。例へば、木戸の如きは、維新の初め、既に征韓の已む可からざるを唱へて居る。内治派の中心中の中心人物とも言はるゝ大久保でも、征韓論破裂の翌年の臺灣征討には、已むを得ざることゝして同意をして居る。但だ彼等は外國に赴き、外國文明の餘りに煉灼たるに驚嘆し、先づ國力を内に蓄へた後に、外に向つて發展するといふ考へを生じたのであらう。併し西郷などの意見も決して無謀の空想ではなかつた。それは、いくら内治々々と言つて居ても、外に向つて手を延ばさん限りは、恰かも潜水が子子を生ずる如く、人心は小成に安じ、社會は腐敗し、到底内治の整理の目的を達することは出来ぬのである。夫れよりも寧ろ、外に向つて活動する時に於ては、恰も、山より落つる谷川の、常に清きが如く、人心も自から内に



振興し、社會も期せずして健全となるといふ論である。

兩論者の  
一致

然るに、時といふものは、大なる調和物であつて、二十七八年役には、端なく、此内治外展の二潮流を一致せしめたのである。否、其れのみならず、内治派に於ても、互ひに相反目したる藩閥とか、民黨とか言ふものを、打つて一丸と爲したのである。日本では、帝國主義が行はるゝ時には、必ず舉國一致するのである。又た舉國一致したる場合に於て、初めて帝國主義が行はれて居るのである。

## 二 桂公の桂公たる所以

公は舉國  
一致の雛  
型

本題の主人公たる桂公に於ては、其人自身が舉國一致の雛型と云うてもよからう。權化と云うても宜からう。桂公が其力を精一杯に發揮したのは卅七八年役であつたが、當時に於ける桂公の働きと云ふものは、實に目覺ましきものであつた。元老も、政黨も、實業家も、論客も、乃至は佛敎家、神道家、基督教徒、若くば外國の宣敎師新聞記者等悉く桂公の手に圓められて、併も我が帝國の發展の

桂公を今  
日に在ら  
しめば

爲めに凡てのもの、力を一の目的の爲めに用ゐたのであつた。何も、桂公彼自身が非常に偉いといふ譯ではなかつた。唯だ桂公が恰も凡てのもの、紹介者となり、融通者となり、連鎖となり、紐帶となり、而して又た中心となり、よく其の目的を達せしめ得ただけのことである。併もこれ丈のことは、決して容易のことでは無い。其の容易のことでないことをしたのが、桂公の桂公たる所以である。若し、今日にでも桂公が在つたならば、此の世界大戦争の時に於て、此の千載一遇の機會を取り逃さず、必らず帝國の力を一にして、國勢發展の功を擧げたであらうと思はれる。今日帝國主義の得失を論ずるが如きは、野暮の骨頂である。我國でも半可通の理屈を言ふ人には、隨分極端なる人道主義を唱へ、孟子も三舍を避くる程の論をなし、或は一種の無抵抗主義ともなり、或は一種の世界主義ともなり、又た或は一種の非國家主義ともなるやうな論者もあるが、併しこれは太陽の前に蠟燭を灯すと言ふやうな譯で、對手にする程の價値も無

帝國主義  
は一大勢力也

い。好む、好まぬは、各自の勝手であつて、帝國主義は現代文明の一大事實である。一大勢力である。何人も之に敵することは出来ぬ。何人も之に逆らふことは出来ぬ。

帝國主義  
と虞翁

手近き一例を挙げれば、近代の世界政治家中で、ビスマルクとグラッドストーンとが、先づ武斷主義と人道主義との兩極端を、代表するものと見て宜からう。然るに人道主義の所謂基督教的政治家の標本たる虞翁が、一度當局者となるや、遂に埃及の占領を斷行したのである。之は虞翁其人にとつては寔に嫌なことであつたに相違は無い。此の一事の爲めに彼は其の親友たるブライイトを内閣より失うたのである。然るに之を斷行せねばならなかつたといふは何故であらう。大勢如何ともす可らざるものがあつたからである。虞翁でさへも此通りである。如何なる議論が有つたにせよ、事實は致し方無いのである。唯だ其の帝國主義

大勢抗し  
難し

に、自ら二箇の傾向が有る。是に就て、吾等は少しく觀察せねばならぬ。

### 三 武力誅求主義と人道綏撫主義

二種の帝  
國主義

等しく帝國主義といふけれども、一は武力誅求主義であり、他は人道綏撫主義である。或は又た何れともつかず、時に前者たり時に後者たるものもある。露の如き、獨の如きが此れである。露國人が猶太人を虐殺し、獨逸人が波蘭人に對する武力暴壓の政策を採つて居るが如き、其の一例である。又た西班牙、葡萄牙等の如きは、一時其の勢力を海の内外に張りたるも、徒らに誅求主義を事とし、今日では見る影も無きものとなつた。和蘭若くは上古史のカルセージの如きも、矢張り、誅求主義の仲間たることを免れぬ。之に反して、古への羅馬及び今日の英國の如きは、人道主義といふことは出来ぬが、少くとも綏撫主義といふことは出来る。羅馬が世界的大帝國を作つたのも、一方には軍隊を要所に配置し、巧みに軍用道路を作り、其の防備に於て遺憾無く、其の秩序の維持に於て遺

綏撫主義  
的帝國主義

誅求主義  
的帝國主義

英國の帝  
國主義

算無きによるが、又た他方に於ては、羅馬の政治が慈仁といふことは出来ぬが、少くとも公正の政を行ひ、所謂一方には兵力を用ゐ、他方には善政を敷き、隨所の人民をして、羅馬帝國の民たるを樂まざるまでも、安せしめたる結果であるものと思はれる。英國の南阿政策の如きも、極めて不徹底のものではあるが、然し、窮極するところを見れば、彼は只武力を缺きたる現代の羅馬帝國にして、前垂掛の羅馬人と云うても宜からう。英國が十萬に足らぬ人を以て、三億に餘る印度人を治め得る所以の一は善政である。英國の印度に於ける政治は、印度人から見れば不平に堪へぬこともある。然し印度人彼自身が印度を治めるよりも、英人によつて治められた方が更に好結果が有る。語を換へて言へば、今日の印度は英人の手によつて、治めらるゝを最も便利として居るものである。之が即ち、英國の帝國主義の本領である。例へば、今日、南阿聯邦の首相ボタ將軍の如きも、南阿戦争の當時は、所謂る刀折れ矢盡きるまで、英國に向つて最

後の抵抗を試みたものである。然るに、一度英國が南阿共和國征服の目的を達するや、忽ち之を綏撫し、ボタの如きは、特に英國皇帝の寵遇するところとなり、樞密顧問の榮職を帯びて、今は南阿聯邦の首相として、威權を振うて居る。そこで、英獨開戦の當時に於て、獨は英の諸殖民地が、秋風の枯葉を拂ふが如くバラ／＼と落ち行くものと思つて居たが、案に相違して、南阿聯邦の如きは、偶々一二の謀叛者があつたけれども、忽ちボタ將軍の爲めに討平げられたのみならず、却つて、阿弗利加に於ける獨逸の殖民地さへも殆んど英國より捲き上げられたのである。

我國の帝  
國主義

我が帝國の所謂る帝國主義なるものは、片手に劍を携げ、片手に日耳曼特種文化を普及するを口實とする獨逸流の帝國主義でも無く、又た血も肉も悉く蛭の如く吸ひ取るところの、西班牙、葡萄牙流の帝國主義でも無く、又た算盤片手に領

與へんが  
爲の帝國  
主義

土を擴張する英國流の帝國主義でも無く、日本には日本固有の帝國主義がある。夫れは、武力の必要の時には武力を用ゐ、政策の必要の時には政策を用ゐ、商業なり、移民なり、文化の普及なり、時の宜しきによつて之を用ゐて行くが、要するに、取らんが爲めの帝國主義に非ず、與へんが爲めの帝國主義である。取つて自ら貪るのでなくて、我が有つて居るところのものを他にも押し進め與ふる主義である。即ち朝鮮併合の如きも、事實の上に此の主義が行はれたるものと見て差支ないのである。之を約言すれば、人道綏撫主義と云うてもよからう。

四 穩健平和なる帝國主義

公は穩健  
なる帝國  
主義者

扱て、桂公は武人出身に不似合に、最も穩健平和なる帝國主義者であつた。朝鮮併合に就ては、伊藤公、山縣公等、その方面は異なるが、各自の立場に於て其勳功ありしは、言ふまでもないけれども、當時の當局者としては、桂公と寺内伯を擧げねばなるまい。桂公は同化作用など、云つて、特別の作爲を用ふるまで

公と日韓  
合併

も無く、當初より一視同仁の主義であつた。寺内伯も同様である。桂公は實を先にして、名を後にしたのである。東洋拓殖會社の設立の如きも、幾多の困難を排して、遂に出で來りたるものであつて、之も桂公の方寸より出たのである。その支那に對する政策の如きも、同様であつて、名よりも實、風袋よりも正味、といふ主義であつた。朝鮮併合の如きは、名實共に有り得可き、よき潮合を見て、桂公、寺内伯の努力によつて、出で來つたものである。もとより先帝陛下の御明斷によらざれば出來ぬことであるが、彼等の翼贊の功も亦た忘れてはならぬ。

公と朝鮮

如何に桂公が朝鮮の事に意を用ゐられて居た乎といふことは、予が屢々公から直接に聞いた話によつても、之を證明することが出来る。寺内伯が總督として朝鮮に於て併合の目的を達せられたる當時、予は其の實況を見て、歸つて之を桂公に語りたるに、公は滿面愉快の色を湛へ、「寔に寺内もよく行つて呉れた。若

し萬一寺内が内地に歸らねばならぬ時があつたらば、其の後任は誰彼と言はず、予が先づ行く可きである」と。此話は一度ならず、他の機會に於て亦た予が桂公より直接聞いたところである。

冒險なる帝國主義者に非ず

斯かる次第であれば、如何に公が大陸政策に重きを置かれた乎といふことは分るのである。併し公は決して冒險なる帝國主義者では無かつた。二十七八年の役、遼島半島割讓の問題に就て、公は最初より反對の意見を持つて居たのである。夫れは、とても、日本の當時の力では、露國に對抗して遼島半島を守り得ることは、出來ない。それよりも、南方に發展し、臺灣を取つて、根據と爲すに如くはなしと考へたのである。ところが滿洲に最も苦戦をしたのは公である。公は實に海城の籠城を爲し、寡兵を以て宋慶等の重圍を受け、數倍の支那兵と戦闘したのである。斯く苦戦を爲し、折角我がものとなせる遼東半島の割讓に異議

穩健にして實際的

を唱へたのを見れば、公は冒險よりも寧ろ引込思案の方に偏したと云うて宜い。然るに此公が、卅六年日露談判に際し、露國が大同江を界として、日露勢力の範圍を定めようといふ意見に反對し、鴨綠江以内より露國の力を驅逐せねば已まぬと決心し、之が爲めには戦をも辭せずとの臍を固めたるを見れば公の帝國主義が如何に穩健にして、實際的なりしかを證明することが出来る。其後、或は公が米國に向つて移民を制限し、日本移民の滿鮮集中政策を採りたる如き、不幸にして其の效果を見ずして逝きたるも、事實は著々實行せられて行くではない乎。

人道綏撫的帝國主義

今日、鮮人が滿洲に向つて赴き、内地人が朝鮮に向つて赴くを見れば、移民滿鮮集中の意見が行はれつゝあるものと見て差支無いではない乎。これを見て、桂公の帝國主義は、日本固有の人道綏撫的帝國主義だといふことが分るの

である。寺内伯の如きも、其の手段に於ては、多少の異同はあるかも知れぬが、其の施政の大方針は矢張り人道綏撫的帝國主義にて、一貫して居るのである。尙申上げたいことは此れに止まらぬが、今日は時間もないことであるから、姑く茲で止めて置く。(大正四年十月九日)

### 桂公記念事業の完成

三つの記念事業

大正六年三月十日、桂公記念事業完成に就き、記念事業會員主となり、其の法要を、芝増上寺に營む。該會は、故桂公の知友、其他直接、間接同公に縁故ある人々に因りて、組織せられたるものにして、其の事業の一は、桂公傳記の編纂也。二は濟生會病院に、桂病室を設くる也。三は桂學術獎勵金の寄附也。今や三者完成せり。是れ其の奉告式を、桂公の靈前に行ふ所以也。

桂公傳記の編述の役

本文の記者は、實に記念事業三個の一たる、桂公傳記の編述者也。記者は記念事業會委員の委囑によりて、自ら揣らず、此の頗る重大にして、且つ困難なる役目を引き受けたり。記者豈に自個の不敏を知らざらん哉。但だ過去十數年政友として、桂公と日々接觸したる舊誼を思へば、義固とに辭す可からざるものあり。特に公の此事に關する遺志を、熟知したる予に於ては、萬障を排しても、之を成就するは、避く可からざる義務なりと、信じたれば也。而して又た予が桂公に對する、恐らくは最後の貢獻なりと、思ひたれば也。

三ヶ年に出して漸く出版す

予は決して最善の力を效したりと云はず、唯だ此の短き二年間に於て、最善の力を效したりと云ふのみ。若し予一個の事業ならば、之が爲めに、十年の歲月を費すも、決して長しと云はず。但だ記念會の事業としては、時日に制限ある

は、良とに已むを得ず。故に予は一面其の經費を節約すると與に、編輯員諸氏を督勵し、全速力を以て、其の資料の拾收を勗め、全速力を以て、其の脱稿を勗め、全速力を以て、其の校訂、出版を勗めたり。若し本書に就き、遺憾の點多しとせば、其の一半の理由は、茲に存せずんばならず。

\* \* \* \* \*

諸方の援助

予は此の機會に於て、桂公爵家、山縣元帥が、多大の援助を與へられたるを、感謝せずんばならず。若し桂公爵家が、一切の書類を記者に開放し、山縣元帥が、桂公との往復書翰を、殆んど舉げて、記者に披示せらるゝ微りせば、記者は到底、此の傳記を成す能はざりし也。記者は實に根本資料の大半を、此中に把り得たりし也。其他傳記の主人公と、舊故の諸老先生、緣故ある各位の援助、亦た與りて力あり。將た編輯員諸氏が、克く記者の旨趣を體得し、之を實現するに黽勉したる、亦た茲に特記するの、必要なくんばならず。

桂公傳は予の一家言に非ず

若し此書をして、記者の私著たらしめば、恐らくは其の面目に於て、多少の異同ありしならむ。但だ此書や其の全責任は、固より記者に存するも、記念事業たるを以て、記者は叙して斷せず、述べて作らず、故らに觸る可き急所を、迂廻したる事、一再ならず。然も記者は自から顧みて、敢て濫筆、曲筆、妄筆、誇筆なきを信ず。若し讀者に於て、不滿あらば、是れ記者と見解の相違に坐するのみ。記者に於ては、一點自から疚しき所なきのみ。

\* \* \* \* \*

悲慘なる桂公の末路

若し世に悲慘の事ありとせば、桂公の末路の如く、悲慘なるもの、未だ是れあらず。公が中間榮達の、龍に翼を副へたる如き、衝天、高飛の快活に比すれば、其の第三次内閣瓦解前後より、死に抵る迄の一年弱は、實に不幸の極と云ふ可し。若夫れ公に假すに、數年を以てせば、公や必ず其の苦き新經驗より新生活

に入り、其の政黨の首領としての新境遇に順應し、捲土重來したるや知る可きのみ。

終天の恨

公や衆流を截斷する底の、大力量あらざりしも、能く隨波逐浪的の活手腕あり。而して更らに乾坤函蓋的の大器度あり。大正の新時代に處して、其の新機軸を出し、新生面を開き、其の晩節に於て、一大光明あらしめたるや知る可きのみ。予は公の傳記編述者として、此の將さに來らんとしたる、大團圓的一幕を、公と與に世田ヶ谷の墓域に埋めたるを、終天の遺憾とせずんばあらず。

桂公を今日に在らしめば

今や我が帝國は、世界鼎沸の最中に於て、對世界政策樹立の一時に於て、國內紛争、上下混闘、滔々たる朝野の君子、恰も見て日本帝國以外に、一物なきものに似たり。人各々其の信ずる所によりて行動す。吾人は決して、我が官民即

今の葛藤を見て、非愛國心の表現なりと云はず。されど國家の全局より見れば、不幸此れより大なるはなし。若し桂公をして今日にあらしめば、眞に所謂る舉國一致の實を擧ぐる能はざる乎、否乎。

諸子忸怩きたる所なきか

死者復た作す可らず。今や寺内内閣の要職にある諸君の如き、憲政會に於ける幹部諸君の如き、何れも概ね桂公の政友たらざれば、其の門下生たり。知らず諸君は、死者に對して、忸怩たる所なき乎、否乎。吾人は唯だ一日も速かに國論を統一して、全國民の力を合同して、對外經營に従事するの日來らんことを祈る。是れ蓋し桂公當年の宿志たり。其の政黨建立の如きも、要するに此の宿志を果す一の方便たるに、過ぎざりしのみ。諸君にして大悟一番せずんば、公や到底地下に瞑せざる可き也。(大正六年三月十日)



大浦兼武君銅像銘

大節ある  
を不朽と  
なす

嗚呼人生の榮辱禍福何んぞ深く論ずるを須んや。唯だ正氣凜然大節ある者、以て不朽と爲すに足る。我が大浦君兼武の如き則ち其人也

\* \* \* \* \*

君の經歷

君は嘉永三年を以て薩摩宮之城郷に生る。少壯志を立て微官に就く。到る處其職に適ふ。遂に累進して四回國務大臣と爲る。而して子爵を授けらる。然も大正四年七月故ありて政界を退隱す。天下君の志を悲まざるなし。而して大正七年十月病を以て逝く。

\* \* \* \* \*

君の爲人

君謙和溫恭人に接する藹然親む可し。然も其の所信を斷行するに到りては、一氣全注、勇往邁進、事の難易と自己の利害とを顧みず。之を以て君の政友たる

もの君を以て一個の長城とせざるなく、君の反對黨たるもの、君を以て一個の敵國視せざるはなし。其の勳功の昭々たるは僅かに其の半面のみ。

\* \* \* \* \*

君の銅像  
成る

比ろ君の郷人銅像を鑄り、君の遺徳を頌し、且つ傳へんと欲し、文を予に徵す。予固より君を知るもの。乃ち其の卓々たる大綱を叙す。其の一生の事功の如きは他に記する所ある可き也。(昭和二年七月下旬)

### 有馬新七先生傳記及遺稿

維新回天  
史上の一  
悲劇

寺田屋事件は、維新回天史上的一幕に過ぎざるも、實に意味深き一幕だ。若し悲劇の文字を、其儘表現するものあらば、斯る悲劇は、容易に其の類例を見出されなう。

典型的志士

此の悲劇の主人公と云はざるも、其の大立者は、實に有馬新七先生だ。先生は薩摩男兒の一人であるが、然も其中にて、最も毛色を殊にしたる一人であつた。南洲は天挺の英雄、甲東は政治家の模範、而して所謂の義を執り、仁を成す典型的志士としては、實に先生其人を推さねばならぬ。

薩摩人の

元來薩摩人は、其の非凡と平凡とを推しなべて、概して政治家氣質に恵まれ

特色

てゐる。彼等は成敗、利鈍の機に敏に、右手に殴り合ひつゝ、左手に握手するを忘れない程のゆとりを持つてゐる。されば彼等には動もすれば功利的に、従つて亦た妥協的の行徑が少なくない。然も此中にありて、我が有馬新七先生の如きは、實に主義の人であり、理想の人であり、確信の人である。此れが記者の所謂の先生たる本領である。

志士の典  
型

先生は決して單純の壯士ではなかつた。夙に山崎學を修め、且つ皇典を研究し、然も亦た天下經綸の大計に就ても、自ら期する所があつた。記者は曾て志士の典型は、長州に吉田松陰先生あり、薩州に有馬新七先生ありと云うた。

都日記

先生の『都日記』は、優美なる國文にて綴りなしつゝ、あるも、是れ實に志士報國の根本史料だ。往年故大浦子爵之を刊行して、同志者に頒つた。記者亦た之

を『近世日本國民史』中に節取した。此れは藤田東湖の『回天詩史』、吉田松陰の『留魂錄』と與に、光を争ふもの。然も雜新史の資料としては、最も重要の一として、認めざるを得ない。

\* \* \* \* \*

本書の著者

本書は陸軍大將町田經宇君が、渡邊盛衛君に囑して編纂したるもの。渡邊君は薩摩男兒にして、其の先輩の行實、佚事に就ては、最も博通者の一人。然も稿を改むる數次。本文の記者は、既に其の稿本に就ても、一讀して、得益少くなかつた程なれば、之を江湖に推薦するも、決して早計ではあるまい。

\* \* \* \* \*

本書の特色

本書の特色は、傳記の外に、遺稿を添へたることだ。『都日記』は勿論、其他先生の封事、書簡、時勢に關する雜篇、何れも有用の資料である。今や寺田屋事件以來七十年。茲に先生の面目、赫然として、世に昭かなるを得たるは、偏に

町田大將及び渡邊君の賜物と謂はねばならぬ。而して先生の靈も、亦た地下に瞑するものあるであらう。(昭和六年五月十八日)

### 『有馬新七先生傳記及遺稿』序

維新回天史と薩長

維新回天の宏謨を翼賛したる、元勳、功臣は、薩長に於て獅子の割前を持つてゐる。殊に薩摩は上に順聖公あり、下に南洲、甲東等諸先輩あり。所謂る、「攀龍鱗」附鳳翼の徒、雲の如く出で來つた。されば其の原因を深く究めざる者は、何故に天公が、餘りに人物を薩長二藩にのみ偏生せしめたる乎を疑ふ者さへあつた。併しその過半の人は、所謂る二三先輩の風を聽いて起つたものであることは、間違ひ無し。

\* \* \* \* \*

薩長の人

然るに其中に於て、單り所謂る文王を待たずして興りたるものがある。夫れは長州に於ては吉田松陰、薩州に於ては有馬武滿たけまる、即ち有馬新七其人である。予竊かに惟へらく、當時薩摩は人物輩出したるが、然も眞に人物中の人物と云ふ可きものを擧ぐれば、第一順聖公、第二南洲先生、第三甲東先生、第四は即ち有馬先生其人であらうと。順聖公の經天緯地の英主であつたことは、云ふ迄も無し。南洲は天成の豪傑、甲東は典型的政治家、而して所謂る勤王志士の本色を發揮したるものは、實に有馬先生その人であつた。

薩摩人氣

元來薩摩人は、平凡なる者と雖も、一通り政治的の機略を備へてゐる。殊に其の進退出處、合離集散に於ては、純理派よりも、寧ろ功利派に屬してゐるかの如く思はるゝもの少なく無い。予は決してそれを非難する者では無い。只だ事實その通りと云ふに止る。然るにこの成敗利鈍を考慮し、最善を得ずんば、次善を

奇特なる一人

取る。次善を得ずんば、更に三善を取るの妥協、調停的雰圍氣の中に於て、勤王の大義によつて、名分を正しくし當初より最善を期して、これを貫徹せんとし、その志の激する所、利害得喪を無視し、險易安危を忘却し、身を以てこれに殉ずる我が有馬先生の如きは、獨り天下に於て、奇特の一人たるばかりで無く、維新に於ける薩摩人中に於て、最も奇特の一人と云はねばならぬ。

主義の人

先生は實に主義の人である。此の一點に於て、先生は南洲、甲東の外に、別に先生の獨自一己なるものを、吾等後世に向つて標示してゐる。其の主義たるや、一時の感情、若くは出來心からで無く、道理を究め、確信に據り、天地を窮め、萬世に亘つて深く自ら主持する所のものである。これは先生が夙に尊王賤霸の山崎派の學を修め、且つ國典を究め、その素養の深且厚なるものあつたが爲めと云はねばならぬ。

命  
本書の使

比ろ町田(字經)大將、渡邊盛衛君に囑して、先生の傳を編し、これを刊行するに際し、予に一言を徵せらる。渡邊君は鹿兒島人士にして、夙に其の先輩の事歴に就て探討、研究、是れ日も足らず。此書の如きも、稿を改むること數回にして成るといふ。予これを一讀して、自ら得る所少なからざるを感じた。予は此書が單に鹿兒島の子弟に向つて、生ける教訓であるばかりで無く、亦た現代に於ける、我が國民の藥石を得たと同時に、更に有馬先生の多年埋没したる幽光を、此書に由りて闡くことの出來たことを悦ぶ。果して然らば、その先輩に對する謝恩、その後進に對する啓示、兩つながらその功德の少なくないことを信じて疑はない。(昭和六年二月二十九日)

『梁川星巖翁附紅蘭女史』序

維新回天  
史と星巖

維新回天の偉業は、一人一個の力にて、成就す可きものではなかつた。其の贊翼の志士中には、有名氏もあれば、無名氏もある。然も其の天上の星の如く、海濱の礫の如く、多くの志士中に於て、最も特色ある一人を求めば、梁川星巖翁の如き、則ち其人と云はねばならぬ。唯一人と云ふのでもなく、第一人と云ふのでもない。然も其の重なる一人に相違ない。

\* \* \* \* \*

複雑なる  
人格

凡そ人物として翁の如く、複雑なる機關の持主は多くあるまい。世に二重人格と云ふ言葉があるが、翁の如きは二重は愚ろか、三重とも、四重とも云ひ得可き人であつた。翁に比すれば、頼山陽の如きは、寧ろ單純にして、與みし易き人物と云はねばならぬ。

翁の一生

翁の一生は、徳川氏極盛の頂上から其の傾覆の下り坂に及んだ。翁は其の少壯時代には、江戸の山本北山の塾に在り、市川寛齋の徒たる詩佛、五山等と周旋し、梁詩禪の名は、儕輩の間に高かつた。晩年京都に住し、勤王諸志士の長老となり、殆んど安政の大獄に及ばんとして、其の一刹那に逝いた。其の中間の東依北托の蹤跡は、今茲に説く迄もなし。翁は詩人たり、雅客たり、高士たり、逸民たり、道學者たり、佛老者たり、志士たり、慷慨家たり、而して策士たり。或は煽動家とも云ひ得べく、或は陰謀家とも云ひ得べし。要するに彼は神龍の容易に狎る可からざるが如く、唯だ時に其の片鱗剩甲を現ずるのみにして、何人も其の全き彼を摸捉し得る者はなかつた。乃ち一言にして評すれば、翁は深人であつた。深人なるが故に、其の胸中には測り知る可からざる深機を藏した。然るが故に、世皆な其の眞面目を解するに苦んだ。

翁の眞面目

著者伊藤君

大正八年八月伊藤君竹東、大垣の金森君毅庵を介し、其の著『梁川星巖翁傳』の序文を徴した。予は平生星巖翁に尤も推服する者。されば未だ君の著作の全文を見ざるも、直ちに之を快諾した。大正十二年の夏、竹東君予を國民新聞社に訪ひ、其の著書の漸く印刷に附せんとするを告げ、予に先約を果さんことを需めた。予欣然之に應じて曰く、印刷半ば成るの頃、必らず之を果さんと。而して昨臘君一書を飛ばして曰く、印刷既に半を過ぐ、請ふ數言を愛む勿れと。予此に於て、聊か平昔翁に就て見る所の一斑を記して、君の誨を乞ふことゝした。若し夫れ君は翁と同郷の産にして、然も其の學問の淵源亦た翁に繋がるものがありと云ふ。而して其の多年の熱心なる研究の餘、此著を做す。其の全き翁の面目を描き出したるや知る可きのみ。縱令萬一然らずと云ふ者あるも、翁の全き面目を知らんと欲せば、必らず君の此著に據らねばならぬこと、是亦た決して

疑を容れず。星巖翁をして知るあらしめば、著者饒舌、乃翁の秘機を勘破し、  
るを一喝するやも、未だ知る可らずであらう。

(大正十四年一月初二夕、湘南觀瀾亭に於て)

### 『維新志士遺芳帖』序

維新志士  
遺墨展覽  
會の開催

國民新聞社が、維新志士遺墨展覽會の計企を、世間に發表したるは實に明治四十二年の天長節にてありき。而して其の上野公園日本美術協會に於て開催したるは、四十三年一月十五日より廿六日に亘り、出品數約三千點、觀覽者實に四十二萬七千三百人を算したり。是れ素より發起者に於て豫期以外の成績と謂はざるを得ず。

\* \* \* \* \*

展覽會の  
光榮

特に初めに閑院宮、久邇宮、北白川宮、朝香宮、東久邇宮殿下の台臨を辱ふし、中にて皇太子殿下の行啓となり、終に宮中より勅使御差遣の榮を荷ふに至りては、維新志士の忠魂義魄を慰するに於て、至上至大の功德たるは勿論。後進の士氣を鼓舞し、社會の風教を扶植するに於て、其の感化の及ぶ所、蓋し臆想し易からず。

\* \* \* \* \*

展覽會の  
目的

惟ふに吾人が該會を計企したる目的は、第一、維新前後最高調に達したる、尊王愛國の精神を今日に復活せしめんとするにあり。第二、維新志士の幽光を闡明し、其の功勞を顯揚するにあり。第三、明治の青年に、實物教育を興へ、彼等をして發勵精進せしむるにあり。第四、維新改革の偉業と其の艱難とを眼前に活躍せしめて、社會の人心を覺醒せんとするにあり。第五、維新史料を蒐集し、過去に因りて、未代を知るの資たらしめんとするにあり。吾人は計企の當

初に於て、其の擧の時流に乖きたるの觀ありしが爲め、聊か少しく疑懼の念なき能はざりき。然も却て未曾有の、盛況を現出したるは、是れ維新興國の氣運、尙ほ鬱勃たるが爲めにあらずや。抑も亦た天下同感の士、期せずして、相戮協し、吾人をして、其志を遂げしめたるが爲めにあらずや。

\* \* \* \* \*

本書の刊行

此の冊子は、江湖の懇切なる需求と、同感者諸君の熱誠なる催告とにより、同文館主自ら振つて、其務に當らんとの意に任せ、出品者諸君の承諾を経たる中より、其の代表的作物とを選擇し、略ぼ其の解説を加へ、之を出版したるもの也。固より紙幅に限りあれば、悉く吾人の希望を充たすに由なし。選擇者尙且つ然り、況んや大方の君子に於てをや。然も諸君にして如何に吾人が此際に苦心したるかを察せば、其の寛恕に於て想ひ半ばに過ぎむ。若し此の冊子にして、縦令幾多の缺點ありとするも、維新志士を不朽に記念せしむるの一助となり、

其の高風清節をして、長へに後進を薰化陶冶するの資料たらしめば、吾人の志や全く報ひたりと謂ふに庶幾し。(明治四十三年七月十一日、國民新聞編輯局に於て)

『勤王志士遺墨集』序

岡田君の美擧

岡田太郎君、維新志士の遺墨を複製し、之を刊行するに際し、一言を予に徴す。

予不肖維新志士の遺墨を搜訪し、之を顯揚するに心を費す、前後數十年。今や天下翕然として之に應じ、而して岡田君の如きは其尤も錚々たる一人也。

\* \* \* \* \*

本書刊行の素志

惟ふに維新志士は皆身を殺して仁を成すもの。然らざるも、亦た其徒たるを辱しめざる烈丈夫也。何んぞ書畫詩歌と謂はん哉。然りと雖も彼等の精神を千古



に尙友するも、唯此に由りて存す。是則ち遺墨の以て寶重せざる可からざる所以。岡田君の所志、蓋し亦た斯の如けむ。若夫れ徒に、之を骨董視し、玩物視するに到りては、何の顔ありて維新志士に對せんとする。

(昭和四年二月念、臺灣嘉義客舍に於て)

『維新志士正氣集』序

本書刊行の理由

方今青春妙齡の徒、口を開けば、耽溺を語り、刹那的行樂を説く。乃ち天下國家の大事忠孝節義の偉蹟に至りては、雲烟一抹に附し、漠然相關せざるものゝ如し。勝げて嘆せざるを得ん哉。是れ『維新志士正氣集』編述の已む可らざる所以也。

\* \* \* \* \*

維新志士遺墨展覽會の開催

吾社(國民新)同人夙に此に慨する所あり。敢て狂瀾を既倒に廻らさんと欲し、曩に上野公園に於て、維新志士遺墨展覽會を開催す。賴に天下の士期せずして相會し、茲に維新回天偉業翼贊の諸志士の爲めに一大示威運動の實を擧ぐるの効果を見るに及びたるは、是れ實に、天地正氣の巋然として儼存するを徵證したる所以として欣快の情禁ずる能はざる也。此の感化を永久に持續し普及せんが爲めに『維新志士遺芳帖』は出で來れり。而して天下同感の君子は皆雙手を擴げて、之を驩迎したり。然も滔々たる世上の趨勢は、未だ吾人の理想を實現するに頗る遠遠なるの憾なしとせず。此に於てか同人相議して別に『維新志士正氣集』を出し、之を江湖に提供することゝはなれり。

\* \* \* \* \*

今試みに此の書を以つて『遺芳帖』と對照すれば彼は遺墨を主とし、此は遺文を主とす。彼は維新前後を主とし、此は維新鴻業の淵源を知らしめんが爲めに

本書と遺芳帖との相違

維新志士正氣集序

寛政諸家に始まり、福岡の巾幗有志者野村望東尼に終る。而して其の編纂の方  
 法たるや、或は郷貫によりて排列し、或は事變に従うて分類す。要するに一部  
 志士列傳體の維新史たることを期したり。且つ夫れ遺芳帖は展覽會出品中の四  
 百餘種に限りたれども、『正氣集』は殆ど全部を網羅し、手簡、日記、詩文、歌  
 俳の類は悉く之を謄寫して、其の本文を收載し、且つ諸家の遺集を涉漁して、  
 之を補足したり。而して其の遺墨は『遺芳帖』に入らざりし傑作は擧げて漏ら  
 す所なく、更に新に諸家の秘襲を請うて、之を登載したるもの鮮しとせず。

本書の特  
色

之を要するに『正氣集』は『遺芳帖』に比し、遺墨九十六頁を減じたれども、  
 本文百七十五頁を加へたり。乃ち吾人が讀むを主眼として之を同好の士に推薦  
 したる所以、此に於て分明なりとす。

\* \* \* \* \*

本書の使  
命

嗚呼此の一書豈吾社同人の志望を實現し得るの効力ありと謂はんや。然りと雖  
 も、若し或は荒山老屋の裡、青燈破窓の前、之を披き、之に對して感憤興起し、維  
 新志士尊王報國の先蹤を趁はんとするものあらん乎。吾社同人區々編述の業、  
 未だ必ずしも徒勞に歸したりと云ふ可らざる也。(明治四十四年八月初三)

### 『小楠堂詩草』跋

詩は心聲  
也

小楠先生は詩人でない。されど先生を知らんと欲せば、其詩を讀むに若くはな  
 し。先生の詩は、實は先生の心の聲である。先生の最も深き胸臆の底にある琴  
 線より發する音樂である。

\* \* \* \* \*

予と本書  
の初對面

予は少時熊本古城堀端の伊勢家——當時横井家は伊勢氏と稱し後に横井に復し

た——に於て、偶々小楠先生の詩艸を見、心竊に其の先生の面目の卷中に躍如たるを覺え、爾來五十有餘年、尙ほ夢寐の間、之を遺るゝ能はなかつた。

本書に再會す

偶々熊本に於ける先生御贈位祭典に際し、其の講演の資料を搜討す可く、本年神武天皇祭日、千葉市に於て、先生の嫡孫横井直興君を訪ひ、再び之を見る。予の驚喜知る可し。

本書の年代

此の詩艸は先生壯時、江戸游學より熊本に還りたる後に始まり、晩年召命に應じて上京する以前に終る。即ち先生の約四十歳前後に始まりて五十五六歳に至る。年代を以てすれば、弘化嘉永の間より、文久元治の際に至る。日本の歴史に於ても、先生の一代記に於ても、最も重大なる時期である。

精神的告白

凡そ先生の一生の學問と事業とは、殆んど此の時間に盡くしてゐる。而して其の間に於ける先生の精神的告白、若しくは靈的自叙傳とも云ふ可きものは、正しく此の詩艸である。予が之を寶重する所以、固よりこれが爲めだ。

複製の價値

人或は此の詩艸の塗抹改削の痕、甚だ多きを病む。然も予が取る所は、寧ろこれが爲めだ。是れ單に先生の作詩の功夫に就て、其の路程を釋るのみならず、亦た先生の心機の如何に發動しつゝある乎を察する指針とするに足る。然もこれは唯だ這中の三昧を解する人と與に語る可きのみ。

淇水翁の補筆

本書は概してと云はんよりも、一切先生の手筆である。但だ「奉命孤身千里身」の一首は、吾父淇水翁の筆記にかゝる。

安政五年先生春嶽公の召に應じて、福井に赴くや、一敬送りて柳川に至る。

途上一敬を轎中より呼で曰く、詩が出来たと。自ら誦して、一敬をして筆記せしむ。

是れ吾父の誌るす所。

物議を醸したる詩

本書の中、曾て物議を醸し、先生に奇禍を來したる「嗟乎血統論。是豈天理順」の一首がある。前年小楠遺稿編纂の際、此詩を刪り去んとの意見があつた。予は之を不可として曰く、此詩は先生が唯だ二典を讀んで、堯舜政治の美を詠じたるもの。我が國體とは沒交渉だ。先生は徹上徹下の勤王家である。何んど之を以て先生を煩さんや。且つ此詩既に世間に喧傳す。今故らに之を刪る。これ却て、先生の爲めに煩を爲すならん乎と。此の如くして遺稿には、其儘掲載した。本書の讀者亦必ず之れを諒とせん。

本書の價値

尙ほ遺稿には壯時の『東游小稿』と晩年越前歸來後の詩、若干を掲げて居る。然も繰り返して云ふ。凡そ先生の詩として傳ふ可きもの、又た見る可きもの、殆んど此の詩艸に罄くしてゐる。

本書複製は唯だ三百部。天下有心の君子と與に之を愛誦すれば足る。嗚呼小楠先生は、實に一代の高人。而して先生の高風を仰ぐ可きもの單り此書ありて存す。(昭和四年五月初九、山王草堂に於て)

『横井小楠先生書簡』跋

先生と東湖

横井小楠先生の藤田東湖と相知る、先生天保十年江戸遊學中にあり。當時藤田

横井小楠先生書簡跋

三十四歳、先生三十一歳、其の交遊の尋常一様ならざりしことは、『東遊小稿』中「訪<sub>二</sub>藤田虎之助<sub>一</sub>夜話極適和<sub>二</sub>虎之助韻<sub>一</sub>」の七絶、及び「臘月念五日、藤田子登招飲列藩諸友在<sub>レ</sub>坐、賦<sub>二</sub>七古一篇<sub>一</sub>述<sub>レ</sub>志、痛加<sub>二</sub>切磋<sub>一</sub>、是所<sub>二</sub>願望<sub>一</sub>」の七古長篇を見て、之を想像するに餘りあらむ。而して先生の藤田に對する印象は、『遊學雜誌』に、

我が訪し時は未だ退公せずして暫待し内に應對極神速なり。布の肩衣奈良の古帷子葛の袴脇差は鐵金具にて木綿糸を太刀卷に巻き纏は皮包なり。當年三十七(四)歳色黒の大男中々見事なり。都下花奢の風を嫌ひ專武事に心懸け、公務の暇には藩中の子弟を引立、尤槍術に達したる由なり。中納言様(齊昭卿)思召格別にて、此春の頃百石の加増加へられ、席も被<sub>レ</sub>進たるなり。當時藩中にて虎之助程の男は少かる可し。

とある。正に是れ一個の東湖、紙上に活躍す。尙ほ前記忘年會席上の七古長篇

には、東湖和韻あり、それを「源判官軟弓を耻候意」云々にて、其の和韻詩稿の返却を求めたる書翰は、予曾て之を友人某氏に於て觀、『小楠遺稿』の卷末に、寫真版として挿入し置きたり。所謂好漢好漢を知り、惺々惺々を識るものに庶幾し。

尊ぶ可き  
書翰

先生の東湖に與へたる書信は、二通藤田家に存せり。(今は後藤仙太郎氏に歸す) 其一は嘉永四年二月十五日附にて、先生諸國漫遊上途前三日なり。其二は嘉永六年八月十五日附にて、宛も彼理浦賀灣闖入の報に接したる際なり。此の兩書翰は、何れも史料として重要なれども、それよりも先生の至誠君國に報ずる眞骨頭の、最も遺憾なく發揮せられたるは、本書翰に若くはなし。

本書簡傳  
來の經緯

本書翰は藤田家現存の書翰と對照して、正しく嘉永三年六月たることを明かに

するを得たり。蓋し本書翰は、先生が江戸遊學歸郷以來、間もなく水戸君臣遭厄となり、其爲め音信打絶たりしが、最近漸く其冤解け、藤田氏等も外間との交通に付幾分の自由を得たることを、久留米村上守太郎氏より先生の親友萩昌國に由りて傳承し、直に此書を村上氏に托して、東湖に寄せたるものなるが如し。乃ち先生の東湖に與へたる嘉永四年二月十五日附の書翰中に、

御歸郷後、他處御取遣も不<sub>レ</sub>苦御様子承り申候間、村上に相頼一封差出申候處、無<sub>レ</sub>程變事出來、心事達不<sub>レ</sub>申、別而感歎千萬に奉<sub>レ</sub>存候。

とあるを見て知る可し。蓋し村上氏は捨身刺姦の舉に出でたれば、固より小楠先生の本書翰を東湖に寄送するの餘裕あらざりし也。

\* \* \* \* \*

而して本書翰頼ひに天地の間に存し、友人長野友博君の挿架に歸す。眞に是れ神呵鬼護と云ふも過言にあらず、予長野君を慇懃し、本書翰を複製し、之を同

本書簡複製の擧

志の士に頌なんことを以てす。君慨然として之を諾し、更に予に囑して本書翰の原委を誌せしむ。誼辭す可からず。乃ち考證の一斑を録して之に應ず。若夫れ小楠先生の學術の光明正大にして、其の規模の宏恢なる、其の氣象の爽快なる、特に勤王の精忠大節に至りては、赫々として本書翰の上に灼爍たり、復た奚ぞ予の呶々を埃て、而して後之を知らんや。

(昭和三年八月廿七夕、大森山王艸堂に於て)

### 『元田先生進講録』序

明治三十三年晩春、伊藤春畝公と與に熊本に赴くや、公熊本人士に向つて演説して曰く、予が貴地に至りて、先づ告白す可きは、故元田永孚、故井上毅兩君の事であると。或る時公予に告げて曰く、往歲屢ば至尊に咫尺して、猷替する所

伊藤公の元田先生の評

あり。而して其の聖裁の跡に就て察するに、至尊の背後に、必らず至尊顧問あるを推察し、百方物色、果して元田先生乃ち其人なるを知り得たり。爾來先生と互ひに赤心を披瀝し、相ひ提携して、聖明を裨補せんことを勗め、遂ひに死生相渝らなかつた。其の顛末は閑を得て、君の爲めに之を語るであらうと。而して公は其言を踐むに違あらずして、空しく哈拉賓原頭の露と消え失せた。

\* \* \* \* \*

伊藤公と  
元田先生

頃ろ伊藤博邦公の好意によりて、元田先生より春畝公に與へられたる書簡を一覽するを得た。無慮數十通、概ね政局の秘機に關するもの。而して如何に先生が、明治天皇と、其の重臣伊藤博文との中間に在りて、下達上進の役目を勗めたる乎。將た先生が如何に春畝公に對して、切々、偲々の良朋、益友であつたかを、審かにするを得た。

\* \* \* \* \*

現はれざ  
る先生の  
半面

世上唯だ元田先生が有徳の君子であり、内廷の信寵を忝くしたる儒臣であることを知る。然も一身の利害を棄て、君國に奉仕したる忠純、至誠の名臣であることを知るものは少い。若夫れ其の所説概ね公正にして、老實、而して能く活機に接觸し、時務に洞徹するあるを知る者に至りては、殆んど天下に是れ無しと云はねばならぬ。然も事實を云へば、元田先生は政治家ならざる政治家であり、策士ならざる策士であり、至高顧問の名なき至高顧問であつた。

\* \* \* \* \*

副島伯の  
元田先生  
評

されば副島種臣蒼海伯が、元田先生を以て、明治第一の功臣と稱したるは、單に聖徳啓沃の上からのみでなく、大政運用の嘉謀、良猷に參畫したる上からも、亦た然く云ふ可きものであらうと信せらる。善く云ふもの未だ必らずしも善く行はずとは、一般に承認せられたる警句であるが、我が元田先生に至りては全く言行一致してゐる。但だ行うたる所は、闇然深藏して、之を他に吹聴し

元田先生  
自評の語

なかつたまでである。而して此れが先生の先生たる所以。「忠純慮國闇然不見」と自ら稱したる所以であらう。

本書の再

『元田先生進講録』は明治四十三年の歳首、即ち明治天皇の末期に刊行した。大正天皇の御宇に至りて、再刊し、且つ之を増補し、縮冊として別に之を刊行した。今や江湖の此書を要むる者、甚だ多し。此に於て、我が今上天皇即位の時に於て、更らに之を新らたに刊行することゝなしぬ。惟ふに一人慶あり、兆民之に頼る。此書を此の機會に出すは、是れ一に我が元田先生の志を成す所以と信ずる。(昭和三年十一月初一 東京大森山王艸堂に於て)

十一月六日、萬民驩呼の中に、風車東京を發し、京都に向はせられたる當日、國民新聞編輯局に於て一校した。

蘇峰 又記

### 『大風流田能村竹田』序

彼は藝術  
の結晶

田能村竹田は、最も精確なる意義に於て、藝術の士と稱す可きもの。彼は其手と眼とが藝術的に働いたばかりでなく、其心が全く斯く働いた。乃ち彼は藝術の結晶と云ふも溢言ではあるまい。

\* \* \* \* \*

藝術の爲  
の藝術

彼は藝術の爲めの藝術を信條とした。彼の藝術は手段でもなく、方便でもなく、目的其物であつた。彼は藝術を假りて其の糊口の資と爲さなかつたと同時に、亦た藝術を藉りて、其の胸中の不平をも鳴らさなかつた。彼の眼中には金銭もなく、權勢もなく、利慾もなく、乃至經世濟民の大望もなく、亦た獨善自樂の満足もなく、唯だ其の全心身を藝術の爲めに打ち込んだ。此の如くして彼の畫は尋常の畫匠以外に一種の氣韻と神采とを帯び來つた。



彼の趣味

彼は詩も作り、當時日本人には餘り著手しなかつた詞をも研究した。和歌にも、煎茶にも、其他の藝道にも、趣味を持つてゐた。書の如き、亦た其の尤なる一であつた。

友を作る  
畫を作る  
が如し

而して彼が交友を作る、猶ほ畫を作るが如く、苟もしなかつた。然も其の一たび作り上げたる交友は、猶ほ畫品と同様他に其類がなかつた。彼と頼山陽との交遊の如きが、其の標本の一である。

彼の交友

竹田には多くの師友があつた。されど彼を最初に感化したるは、熊本の高本慶藏即ち紫溟先生であらう。而して交友としては山陽の感化を第一に措かねばならぬ。山陽も亦た竹田から同様若しくはより以上の感化を受けたことは云ふ迄

もない。

彼の眞面目

竹田には藝術家良心の閃きが其の出入進退の上にも、其の詩、書、畫作品の上にも將た處世對人の上にも、極めて明瞭に看取せらるゝ。彼は固より人間生に無頓著ではない。固より隱君子ではない。而して亦た固より高蹈を以て、他に傲る逸民でもなかつた。彼は藝術家であつた。而して他の滔々たる藝術家と其趣を殊にしたるは、殆んど眞醇の藝術家であつた爲めだ。

著者木崎君

木崎君は現代に於ける頼山陽研究者中の權威者だ。隨て其の研究の竹田に及ぶ可きは必然でもあり、且つ當然でもある。本書の編纂方法に就ては、君自ら結構し、君自ら剪裁す。固より予の容喙す可き餘地がない。但だ其の當今に罕なる力作にして、且つ竹田研究者を裨益することの多大なる可きは、予が確信す

る所である。君が一言を徴するに際し、誼辭す可らず。乃ち平生の所見を記して君に質し、併せて本書を讀むの君子に質す。(昭和三年十二月初七)

『乃木』序

大將と予  
自分は乃木大將を知つてゐる。別に深き交際ではなかつた。併し尋常一様でもなかつた。

予は大將の盲信者  
自分は乃木大將の盲信者ではない。大將も亦た人間だ。人間は決して完全無缺の者ではない。大將の如きは何れかと云へば直情徑行の人だ。其の瑕瑜相ひ掩はざるは勿論だ。特に自分は乃木大將の先輩、若しくは儕輩の人々とも親しく往來し、その人々から乃木大將 就いて——其の長所短所に就て——忌憚なき

批判を聽いてゐる者であつた。

予は大將に敬服せる一人  
併し一切を乗除して、自分は乃木大將に敬服する者の一人である。大將の責任觀念、奉公觀念、即ち一言にして盡せば、赤心報皇の大精神には、隨喜渴仰するを禁ずる能はざる者である。

躬行實踐の人  
此れと同時に、如何に大將が、躬行實踐の人であつたかを、自分は熟知してゐる。大將は之を現代の世俗社會に於て見るよりも、寧ろブルタークの『英雄傳』中にでも見る可き人物の一人であつた。大將を想へば、端なく羅馬の英雄シンシ  
ンナタスに想及せざるを得ぬ。

大將と予の『吉田松陰』  
自分は大將の赤坂なる新坂町の邸を屢ば訪問した。そは舊著『吉田松陰』の改

訂に際して、大將と打合せする事があつたが爲めだ。事實に就ても相談した。議論に就ても商量した。甚しきは文字に就ても、大將の意見を聴取した。

熟慮斷行  
の人

乃木大將は、何事にかけても決して粗枝大葉の人ではなかつた。寧ろ綿密に過ぎたる如く想はれたる人であつた。大將の金言熟慮斷行の如き、其の熟慮の二字が、最も意義あるものと信せらるゝ。自分の改訂『吉田松陰』校正刷には、大將が親しく精讀して、其意見を加へてゐる。自分は文字の取捨に就ては、必ずしも悉く大將の意見に、服従しなかつた。所謂此れは和して同せずと云ふ可きものであらう。大將も亦た深く之を咎めなかつた。斯くて改訂『吉田松陰』の明治四十四年に出版せらるゝや、大將は其の若干部を購うて、之を各所に分配せられた。

大將の來  
訪

乃木大將は亦た我が青山草堂に屢ば來訪せられた。それは毎時早朝であつた。大將は馬丁をも伴はず、其馬を門前の公孫樹に繋ぎ、玄關の靴脱の上に立つて徳富さんと呼ばれ、立ちながら話された。取次の者が、應接間に誘ふも、決して上らず、その爲め予は寢衣の儘、顔をも洗はず、寢床より飛び出したことが一再ではなかつた。(因に云ふ、自分も決して朝寢坊ではない。)而して時としては自から贈與の書籍を携へられたことがあつた。

大將と山  
鹿素行の  
著書

自分は乃木大將の愛讀したる山鹿素行の『聖教要録』と『中朝事實』の原刊本を藏してゐる。故に之を大將の閱覽に供し、卷初の餘白に題字を依囑した。大將は之を諾し、その文句の撰定を、予に需められた。予が彼是と思案してゐる中に、大將は中耳炎にて、赤十字社病院に入院することとなり、その際使もて之を予に返却せられた。右の二書は、今尙ほ成實堂中に藏してゐる。

著者目黒君

頃ろ目黒野鳥君、其の翻譯になる乃木大將に一言を題せんことを徴せらる。君は英語に堪能に、邦文に練達す。而して此書は外人の乃木大將に對する感激の記録である。其の世道人心に裨益する良書たるや、論を俟たぬ。予は別に云ふ可き所がない。然も野鳥君と自分とは尋常一樣の友でない。而して乃木大將に對する敬慕の念は、年を趁うて愈よ殷である。故に聊か平昔の感想の一端を録して、野鳥君の誨を乞ふことゝした。(大正十二年十二月廿六日 大森山王草堂に於て)

『大倉鶴彦翁』序

維新風雲  
兒の一人

維新の風雲は、政治、軍務、學問、藝術、其他社會の各方面に卓犖の人物を輩出せしめたり。乃ち實業界に於ても、岩崎君東山の如き、澁澤君青淵の如き、其

人尠しとせず。我が大倉君鶴彦の如き、亦た實に其中の錚々たる一人となす。

人生奮闘  
史

米壽翁鶴彦君の生涯は、一篇の人生奮闘史にして、亦た成功史也。君や北越に生れ、家世々地方の豪族たり。然も不羈自恃の氣象は、易に居り、逸に安んずるを屑とせず。青春十八歳、自から運命を開拓す可く、決然志を立て、江都に出でたり。爾來七十年、事概ね志の如く、功或は之に超ゆ。然も其の意氣精神、依然たる當時の十八青年たり。

君の眞面目

君や膽略あり。維新當初、腥風血雨に滿つの際、夷然として死生の巷を出入して、毫も顧慮する所なかりき。偶々九死一生の極所に陥りたりしも、只だ傍若無人の氣膽と縱横無礙の機略とを以て、之を脱するを得たり。他人極所に於て、退一步法を用ふ。君は却て進一層法を用ふ。而して其の進一層法を用ふるや、

桑榆日薄の八十翁の今日に於て、最も然りとす。是れ君が老いて愈々壯なる所以。鶴彦君の本領此に於て之を見る。

國家に寄  
與する所  
不鮮少

凡そ戊辰の役を首として、最近の世界大戦役に至る迄、國家戎事ある毎に、其の軍需品の調達、輜重、糧餉の供給、運輸等一として君の干係せざるものあらず。然も君の國家に貢献したる豈啻戎事のみと云はん哉。通商貿易、殖産興業、苟も國家を富強ならしめ、民生を博厚ならしむるもの、君の力に俟つ所、洵に鮮少ならざりし也。是れ君が純然たる一個の實業家として、當世に名譽ある勳章と位階とを贏ち得、遂に男爵に叙せらるゝの光榮を忝うしたる所以也。

能く財を  
用ふ

君や能く財を生ずるのみならず、亦た能く財を用ふ。天下財を生ずるの道に巧にして、財を用ふるを知らざるものあり。財を用ふるの道を解して、財を生ずる

に拙なるものあり。但だ君や、能く積み能く散ず、天下富を以て雄なるもの何んぞ限あらんや。然も君が如く能く富を社會公共の爲めに、善用したるもの、それ幾許ぞ。君や實に大倉集古館の創立者にして、寄附者たり。君や實に東京に、大阪に、朝鮮に三個の商業學校の設立者たり。恩賜財團濟生會の成立せんとするや、君や實に卒先して、翼贊者の魁となれり。其他神戸に於ける大倉山公園の如き、郷里に於ける各種事業の如き、固より十指を屈するに遑あらず。

君の交友

然も君や、決して富を銜うて、自から快とするの鄙夫にあらず。其の節す可きに於ては、一錢一厘の微も決して忽にせず。然も其の揮ふ可きに於ては、百萬以て足れりとなさず。曩に大久保甲東、君が爲めに「哲人知機」の四字を書して、之を與へたり。惟ふに甲東は豫じめ君の一生の事歴を洞見したるが爲め乎、非乎。伊藤公は財利の念最も淡泊なる經世家なりき。然も恒に君を親近し

たり。若し實業方面に於て、公の親交者を求めば、必ず君を以て、其の唯一とせざるも、第一とせざるを得ざるべし。山縣公は、自から一介の武弁を以て居れり。然も亦善く君を遇したりき。石黒況翁は古勤王家の精神を、明治大正の時代に把持したる志士也。然も恒に君と相好きもの、必ずしも單に郷友たる所以のみにあらず。古人曰く、其の交る所を以て其の人を見るべしと。予は君が、所謂の實業方面以外の交友に就てトするに、君の皇室中心主義と、君の一意國家に奉仕するの誠意とを識認せざらんとするも能はざる也。

桂公の評  
言

桂公會て予に語りて曰く、「世に完人無し。然も若し今ま北海道の大原野に百萬石の城下を經營せんに、鶴彦君以上の適材を得る、殆んど不可能なり」と。桂公亦た完人にあらず、然も人を觀るの明識に於ては、公も亦た一隻眼を具へたりき。苟も君の事歴を知る者は必ず公の此の言に裏書するを辭せざる可し。

一個の商  
賈にあらず

君は少小より尋常一様の商賈にあらず。蚤に眼を世界の大勢に注ぎ、恒に世運の開拓を以て、自ら任じたり。而して中年以降、世界列國角逐の局面、漸次東洋に推移するを見、自ら之に善處するを怠らず。而して其の晩年は殆んど其の心身を日支提携に傾注したり。されば君の交友は清國の往時より民國の今日に至る迄、支那全土に普ねく、而して君の事業も亦た、滿蒙より禹域の各方隅に及べり。而して君慨然として曰く八十八歳以降は内地の業務は、後繼者に一任し、専ら身を以て之に當らんと。昔は山陽賴氏、君の祖父定七翁の墓に銘し、翁を以て馬文淵に擬せり。然も予を以て之を見れば、寧ろ君を以て馬文淵に擬するの一層適切を覺えずんばあらず。所謂の鞍に據りて顧盼以て用ふ可きを示したる老伏波の意氣は、尤も君に於て之を見る。

能、藝に  
遊ぶ

君は學者を以て自ら居らず。然も能く學を好み能く藝に遊ぶ。其の趣味最も博く、美術、音樂、百般の技藝皆な賞識せざるなし。時に狂歌を詠じて懷を暢ぶ。而して其の筆翰の如きは、殆ど堂に入る。

\* \* \* \* \*

君と予

予や江湖の一老書生、固より實業界に於ける無縁の衆生のみ。然も君と相知る四十年。聊か其の半面を詳にするを得たり。蓋し君が尊皇報國の精神に於て、默會する所あれば也。頃ろ君の門下鶴友會の諸氏、君の傳記を編し、君が米壽の祝意を表せんとするや、君予に囑するに、其の卷頭に題せんことを以てす。予不敏を謝す。然も君強ひて容さず。故に聊か其の平生見聞する所の一斑を掲げて、之に應ず。惟ふに君や其の福壽兩ながら祖父定七翁に邁へ、其の事功は乃ち之に倍蓰す。君や能く其の祖先を顯はす者に庶幾し。但だ予の不文山陽賴氏の十分の一に値ひせざるを是れ憾とす。然も君の一代の行實、其の綱目掲げ

て本書に在り、讀む仔細に之を見れば必ず予が言に於て豁然貫通する所あらむ。

(大正十三年八月十八日大森 山玉艸堂にて)

### 國木田獨歩君

君と予

國木田獨歩は、予の『國民之友』及『國民新聞』の初期時代からの知友だ。獨歩を矢野龍溪翁に紹介して、大分縣佐伯の學校教師に送りたるも予である。獨歩を『國民新聞』軍事通信員として、千代田艦に便乗せしめ、有名なる『愛弟通信』を草せしむるに至りたるも予だ。而して獨歩の最初の結婚問題にも、予は不本意ながら、淺からぬ干係を持つてゐる。

\* \* \* \* \*

新日本文學の天才

予は此の如く獨歩とは親しき間柄であつたが、然も明治時代に於ける新日本文學の天才であつた事は、漸く其の晩年に至りて識認するを得た。予は此に於て、自ら文人としての獨歩を知ることの、蚤からざりしことを悔ざるを得ず。而して又た文人として獨歩を解することの淺かりしことを、慚ぢざるを得ず。されど頼

ひに其の生前に於て猶ほ自ら之を知り、之を悔ひ、之を慚ぢたるを欣幸とする。(昭和五年二月四日)

### 島木赤彦君

予は君の愛讀者

予は歌人では無い。又た和歌に就ては、古きことも、新しきことも、何等素養が無い。但だほんの素人として、作者たらざる迄も、讀者である。然し現代の作家に就て愛讀するものを求むれば、島木赤彦君の如きは、唯一と云はぬが、重なる一である。

\* \* \* \* \*

作歌は君の生命

赤彦君の作は、其の長短得失は暫らく措き、作者の生命を打込んでゐる。歌が君の道樂でも無く、遊戯でも無く、技術でも無く、職業でも無い。全く君の生命

國木田獨歩君 島木赤彦君



である。予は作者その人とは何等直接の交渉を持たなかつた。併し其人を知らんと欲せば、其友とする人を見よと云ふ意味に於て、予は平福畫伯を通じて君を知ることが出来ると思ふ。

\*

\*

\*

\*

\*

\*

不羈獨往  
の精神

而して此頃世に出でたる、君の門人に依つて著された『赤彦遺言』なる一書を讀んで、愈々予が君に就て考へた處を確かむることを得たるを喜ぶ。君は信州人に特有なる不羈獨往の氣分に富んでゐた。されば自己の所信に熱中する程、他に向つて寛大であつた乎。將た其の眼界も自ら限定してゐる方角には、秋毫も漏らさなかつたが、其の視野は果して廣大無邊であつた乎。それ等の事は予は知らない。されど君は實に忠實なる現代の歌人であつた。その全集の世に出づべきは當然すぎる程當然である。(参照、拙著『生活と書籍』中、太虚集を讀む)

(昭和四年九月五日、民友社に於て)

### 巖谷小波君

君の還曆

昔の人が「處世如大夢」と申したが、實にその通りと思ふ。予は巖谷小波君が紅顔の美少年である時から、遙かにその風采を見たことを覚えてゐる。然るに何時の間にやら君も還曆を迎へられ、還曆記念の書物が出来ることゝなつたと云ふは、眞に夢の如き心地がする。獨り君が老境に向はれたるばかりで無く、予も又た自ら老たるに驚かざるを得ない。

\*

\*

\*

\*

\*

\*

一新天地  
の開拓

小波君は一六先生の愛子であり、當代に於て、名家の子弟が得らるゝ限りの教養を受けられたれば、其の天稟の秀發に加へて、向ふ所可ならざる無さは、言を俟たない。小説の方面は固より、曾て京都に於て新聞記者としても、立派に成功せられた様に覺えてゐる。然るに君の炯眼なる、當時何人も氣が付かない

巖谷小波君

新天地を開拓し、少年少女の友となつて、口に、筆に、日本全國を勸化し、其の足跡は延いて帝國の領土及び、殖民地にも及び、天下何人も「子供の小父さん」として小波先生を知らぬ者は無い。

一の國家  
予は實に君の此の方面に於ける努力の大なると共に、効果の少からざるを認め、單に文壇人としての君ばかりで無く、國家人としての君に、感謝せざるを得ない。

\* \* \* \* \*

堀江松華  
但だ此際に思出すは、君と共に京都の新聞界に筆を執りたる、予の従弟堀江松華のことだ。彼は記者より一轉して、新聞の持主となり、經營難に苦しみ、予も及ばずながら多年これを援助したが遂に支へ切れず、これを人手に渡し、晩年は南嶺と號して、畫を賣つて自ら給したが、前年遂に逝いた。彼にして若し

初より君の如き炯眼あらしめば、彼は必ず何事か貢献し、若しくは成功したであらう。

\* \* \* \* \*

世に究する極めて賢明  
それを思ふにつけても、小波君の世に處する途に於ては、極めて賢明であることに感服せざるを得ない。冀くは健在なれ。若し天が大なる祿を君に與へなかつたならば、希くは大なる壽と康とを君に與へよ。(昭和五年十一月「小波先生」による)

### 無佛居士

其の經歷  
無佛居士、阿部充家君は、紅顏鬢髮の青春より、志を國家に存し、或は肥薩の間を奔走し、或は東都に出て天下の志士と其の議論を上下し、専ら帝國立憲政治扶植の爲めに努力し、時に逐客となり、時に法規に問はる。而して有志の徒龍

無佛居士

驪虎變の秋に迫んで、君獨り一老書生として、高蹈退藏、自ら其の功に居るを屑とせず、君や蚤に鎮西に於て育英の事に關り、更に東都に於て、操觚の業に従ふ。明治二十七八年役には卒先從軍記者として、矢石の間を馳驅し、三十七八年役後講和條約反對論の勃興するや、身を挺して之に衝り、乃ち大正政變に際しては、更に其の所信に殉じて、死生を度外にす。其俠勇義烈實に懦夫をして起たしむるに足る。

\* \* \* \* \*

居士の眞面目

大正初期朝鮮の筆政に任ずるや、慨然明治天皇日鮮併合の聖旨を奉戴し、誓て之を貫徹せんことを期し、其の朝鮮人士に對する同情の深厚なる、洞察の明敏なる、包容の寛裕なる、而して其の眞摯懇惻、民を視ること傷めるが如きの風あり。是を以て朝鮮の老若男女、君を以て與に諮る可く、借に託す可きの人となし、相率ゐて君の門に集る者、皆然りとす。君や少壯誠心誠意治國平天下の

道に志し、中年宗演宗海兩師に親炙して、禪を修め、頗る自得する所あり、是を以て身は紅塵の裡に彷徨するも、心は白雲の上に在り。貧賤に戚々たらず、富貴に汲々たらず、口未だ曾て奉仕を説かざるも、一生唯だ奉仕を以て始終す。而して其の人格は齡と共に躋り、其の清操は老と共に馨し。

\* \* \* \* \*

居士の古稀祝賀

昭和六年三月十四日、我等同人胥議し、君の爲めに古稀の賀筵を開き、茲に不腆の物資を供へ、聊か君の壽康無疆を祝せんとす。不肖君と相知る最舊、且深、君の友誼を忝くする最久、且渥、乃ち發起人諸君の命に應じ、敢て自ら揣らず、其の所知の梗概を叙して祝詞と爲す。(昭和六年三月十四日)

池部 鈞 君

君と予

私と池部鈞君とは久しき間の友達であります。池部君が上野の美術學校を巢立つや否や、平福百穂畫伯の紹介もて當時私が監督してゐた『京城日報』の繪畫主任の一人として採用することゝ致しました。而して君は私の京城の寓居愛吾廬の同人として、いはゞ私共一同と書生々活をいたしました。

\*

\*

\*

\*

\*

\*

只藝道に  
精進する  
のみ

當時の池部君は中々元氣の男であり、専ら藝道に熱心する以外は、極めて恬淡の壯价として誰からも愛せられました。斯くて『京城日報』にて修業が出来上つた後、私に伴はれて『國民新聞』に來り、毎日私共と編輯机案を與にしたることも、かれこれ廿年を越えたと思ひます。その間君は文展若しくは帝展に屢々入選して立派な泰西畫の撰手となりました。併しそれよりも私が驚嘆したの

は漫畫界で新天地を開拓したことであります。

\*

\*

\*

\*

\*

\*

君と百穂  
君

當時の國民新聞社に於ては平福百穂畫伯が専ら議會を擔當せられました。畫伯の議會畫報は到底何人も追隨をゆるさない程の特色がありました。而してその自然的の後繼者は池部君でありました。池部君は決して平福先生の模倣者ではありませぬ。君は何人の足跡をもたどらず、自ら獨自一己の面目を發揮してゐます。

\*

\*

\*

\*

\*

\*

君の撞場

而して君の觀察はいはゆる政治問題の中樞に徹し、その手の觸る所自から春を生ずるの趣があり、時としては君が一筆一掃の漫畫は千言萬語の論文よりも活殺自在の効果が多いやうに思はれます。當今の漫畫界には眼ありて手なき者あり、手ありて眼なき者あり、唯だ吾が池部鈞君は、眼手相應じて單に繪畫として

も佳、而して漫畫としては更に佳であります。又た池部君の特色は、その滑稽機智が、態とらしく製造的で、強ひてくすぐりて他を笑はせねばならぬといふ風の惡趣味に墮ちず、輕妙にして且痛快であり、自然にして且要領を得てゐます。慾を云へば限りがありませんが、現代の漫畫家としては、手法著想の兩全に幾き一人を求むれば、何人でも先づ君を推さざるを得ないであらうと存じます。

\*

\*

\*

\*

\*

\*

君の東日  
入社

君と私とは別段その進退を相談した譯ではありませぬ。されど私が國民新聞社を去るや、君亦た直ちに去り、而して私が大毎、東日の爲めに筆を執るや、君亦た來りてその殊技をこの紙面に供せんとしてゐます。如何にも因縁ありと申さねばなりませぬ。漫畫家として池部鈞君は天下に定評があります。今更私が推稱を要しますまい。されど君を本紙（東日）に迎ふるに際して、一言の紹介を爲すは先進者の一人として、或は私の義務であらうと信じます。（昭和五年三月九日）

## 小崎弘道先生

## 一 緒 言

先生を語  
る好機會

本日は私共にとりまして、寔に嬉しき日で御座います。殊に私にとりまして、近頃珍らしき程嬉しき日で御座います。それは何故乎と申しますれば、私は兼ねて小崎先生御夫婦に向つて、何時乎の機會に申上げて見度いと思つてをつたので御座いますが、遂その機會が無いので、多分小崎先生の柩の前でも、申さなければならぬ乎と思つてをりました。然るに先生の御面前に於きまして、私の申上げ度いことを、述べる機會を與へられましたことは、私に於きまして、眞に難有いことで御座います。

予と先生  
との關係

もう一つ有難いと思ひますのは、本日牧師友人と書いて頂いたことであります。私は小崎先生の牧會以前より、先生を知つてゐるので御座います。先生が

牧會五十年と申しますれば、私は六十年間も先生を知つて居るので御座います。併しその六十年間に於きまして、私は決して先生を友人など、云ふ考は持たなかつたので御座います。

然らば友人で無いなら何乎と申しますれば、私は先生を常に先輩と云ふ考を持つてをりました。只今になりますれば、私の方が老人である乎、先生の方が老人である乎といふことになりますれば、投票でもしないと分らないのであります。併しながら、昔は決してさうではなかつたのであります。私と小崎先生の間には、天と地ほどの差別が御座いました。それで私は常に先生を先輩と云うてゐたのであります。又た先生も實は私に向つて、何かお話になるときは、まるで御言ひ聞かせの様なことであります。過日も私をお訪ひになつて、何乎話して呉れといふことで御座いましたが、頼みにいらしたのか、御命令にいらしたのか分らないのであります。先生はまるで、私が先生の仰言することは、大

抵は聞くものと極めて居らるゝ様で御座います。併し私は常に先生を懐しく思つて居りました。

然るに今度牧師友人と、立派に書いて頂きましたことは、何だか昇格でもしたやうな氣持で、大變愉快に思ふのであります。

先生と予  
等一家

そこで今日私は友人といふ資格で、申上げて見度いと存じます。教會の事に就きましても、私達は全く無關係ではありませぬ。私は不幸にして、當教會に屬しては居りませぬが、私が今尚ほ慕つて止まぬ私の母も、又た私の妻も、この教會の會員で御座います。さういふ譯で此の教會の盛んになることは、私も常に衷心から祈つて止まぬことであります。殊に小崎先生御夫婦及び御一家の御幸福を、祈つて止まぬのであります。

一つの話に  
似た古

話は古くなりますが、牧會五十年と申すことは既に大分古いことであり、更に私が先生を知つたのが六十年と申しますと、更に十年古いわけであります。古

といふことでは五十歩、百歩、或は五十歩六十歩である。そつといふ古いことは皆様も御存じないと存じます。又た知つてゐる方が、少いと存じますから、昔の事から申し上げます。

## 二 先生と予の青年期

秀才の評判  
私が當牧師を知つたのは、餘程前のことで、私がまだ十歳に満たぬ頃で御座います。その時熊本に大變若い學者に、小崎太郎——たしか太郎といつた様であります——といふ人があつて、その人は無點者といふ評判でありました。無點者と申しますれば、句點をつけぬ漢籍を讀むといふことで、さういふ人は熊本にも多くなかつたのであります。それを若い人で、點をつけずに讀むといふことで、評判でありました。それが即ち小崎先生であつて、小崎先生は若い時から、そうした評判の方であつたのであります。

洋學校に

私が洋學校に入りました時には、先生は既に世話役の名であつたと思ひます。

於ける先生

幹事とまでは行かなかつた様であります。幹事心得位のところであつたと思ひます。小崎先生は當時普通の學生では無く、普通の先生でも無く、恰度學生と先生の合ひの子位であつた様に覺えて居ります。

元氣舊の如し

その時分から今日まで、お見掛けする御様子は、一寸も變つて居られぬのであります。先生はおいくつか知りませぬが、如何にも剛勢であります。先生がものをいはれると如何にも、温厚篤實に見受けれます。そつといふ人の傍には、近付くのも恐いやうであり、近付かないのも残念の様で、私は先生の傍に一步近寄つたり、一步退つたり、まるで先生の周圍を歩いて居つたのであります。此の洋學校の團體が、即ち此席に居られる岡田翁（岡田松生氏）も先程云はれた熊本バンドであります。小崎先生はやがて熊本から京都に上り、私は東京から京都に下つて、京都で又た先生にお目に掛つたのであります。此先の話は、どうしても私自分のことを申し上げねばなりません。自分のこと、申しても、岡

田先生のやうに、善いことではありませぬ。私自身の口からは、申したくないことではありますが、致方無いから申します。

同志社に於ける予

私が同志社に行きましたのは、十四歳位の時でありました。先生はおいくつであつた乎知りませぬが、先生は昔から老人の様であつたのであります。兼ねて不徳の私であつて、私が同志社に參つた時は、私と同室する人がなかつたのであります。同室どころでは無く、近付くことも嫌つたのであります。此處に居られる岡田翁の如きは、その近邊にゐると、始終お叱りを受けたのであります。

同志社に於ける先生と予

當時同志社には寄宿舎が三棟あつたのでありますが、私の入る室は一つも無かつたのであります。その時に私を入れて頂いたのが、小崎先生の室でありました。實に先生は如何にも寛厚にして、長者の風があるといふことを、敬服したのであります。先生は私に直接忠告されることも無く、私が云ふことを黙つて、私のいひ終る迄聞いて居られるといふ風でありました。私も云ふと胸が

自ら守る可きを守

すつとするので云ふだけの事は、先生に申して居つたのであります。かういふ譯で、私が同志社に於きまして、安全なる場所を見出したのは、小崎先生の室であつたのであります。これは私が今猶ほ感謝してゐるところであります。その時から小崎先生は、御自分の學問を以つて、誇りとするわけでも無く、雄辯を以つて誇りとするわけでも無く、力量を以つて誇りとするわけでも無く、守るべきことを守つて居られたのであります。

三 容易に信せず、信ずれば動かさず

話は少し後に戻ります。熊本バンドといふお話が先程もありましたが、皆様は小崎先生はいの一番に信者になつたらうと思はれるであります。實はその逆であります。先生が一番尻尾に信者になつたのであります。大抵同級の人や、次の級の人が信者になつてしまつても、先生は動かなかつたのであります。まるで旅順の二〇三高地の様に、此人だけは落ちなかつたのであります。

熊本バンドの最後の信者



第一に信  
ぜざる理  
由

それが如何なる譯で落ちた乎、私は子供でその邊のことは、よく分らなかつたが、最後迄頑張つて、最後に信者になつたといふことを、知つて居ります。その事に就て、私は二つの考を持つて居ります。一は小崎先生は儒教の素養があつた。それで自分丈けの流儀の立場がちやんともう出來て居たからであらうと思ひます。もう一つは物事に容易に變らず、雷同せず、安心したことでなければやらぬからであります。

信すれば  
今尙不變

兎に角先生は、一番後から信者になつた方ではありますが、一度信ずると、今尙ほその道を歩いて居られるのであります。私自身はさういふ譯には行きませぬけれ共、小崎先生にはその點、實に感心して居るのであります。

動かざる  
人

世の中では自分が酒を少し呑んでも、飲まぬ人を感心致します。私は酒は絶対に飲みませぬ。これは譬としてお聞きを願ひます。兎に角、小崎先生は動かぬ方であります。偶には私も少し位動いたらと思ふことがある程、先生は動かぬ

方であります。併し概して云へば、動かぬ方がいゝのであります。昔の人が嘗つて評した言葉がある。"He is what he was, He was what he is" 彼は今尙ほ昔の如く、昔も又た今の如し、實に私は先生のことをさう思つて、不思議に堪えぬのであります。

#### 四 牧師以外の功勞

基督教文  
學の開拓  
者

私はそれからもう一つ皆様が、小崎先生牧會の事を申されまして、靈南坂教會のみならず、組合教會、基督教會全體に於ける先生の功勞を申されました。私はそれにもう一つ付け加へて申したいと思ひます。それは小崎先生は基督教の文學、及び新聞雜誌の知識方面の開拓に、多大の功勞があるといふことであります。

基督教向  
上の功勞  
者

昔は基督教信者と申しますれば——これは悪口になりますから、申し上げませぬ——餘り香しきものではなかつたのであります。處が小崎先生の如き人——

小崎先生一人でなく、此に居られる内村先生、松村先生、亡くなつた植村正久先生などもその中に入る方がありますが——大いに其の文化知識、其他の方面に於きまして、日本の知識階級に向つて、砲彈を打出したのであります。これは日本の歴史に於きまして、注意すべきことであると信じます。

先生の著述

先生の最初の著述は『政教新論』で、これは私が熊本にゐる頃出来たのであります。多分明治十四年から七年の間であらうと思ひますが、確實な日は先生がよく知つて居られると思ひます。それからやがて基督教青年會の『六合雜誌』が出来、警醒社が出来、『毎週新報』が出来たのであります。此等のものゝ中には、小崎先生の力が最も多かつたのであります。多分『政教新論』と植村先生の作られた『真理一斑』は、當時よく人の讀んだ書でありませう。此等の點に於ての先生の働きは、實に驚き入るものがあるのであります。

金錢に恵まれぬ人

私も何から世に引出されか乎と申しますと、自分の原稿が『六合雜誌』に出、『毎週新報』に出たのに始まるのであります。それは私にとつては寔に仕合せでありましたが、『毎週新報』には寔に不仕合せでありました。私の原稿が、『毎週新報』に掲載せられた爲めに、『毎週新報』は發行を停止せられ、飛んだ御迷惑をかけたこともあつたのであります。原稿を、『六合雜誌』にも出しましたが、此處でお斷り致して置きますが、原稿料は頂かなかつたのであります。それは小崎先生はその方には、初から終迄恵まれなかつたのであります。然しそれが先生の一の取柄であると思ひます。

## 五 先生と予の家族

さういふわけであつて、私共は小崎先生に種々の點で、お世話になつて居ります。更に一言つけ加へさして頂きますが、今から四十三年前、即ち明治十九年十二月、私が家を携へて東京に著いた時に、草鞋を脱いだのは靈南坂で、それから湯淺治郎君の家に二三泊し、次にはこの教會の後、靈南坂町十四番地に住

予の上京當時と先生

んだのであります。當時は鍋も無く、釜も無く、手桶も無く、金は固より澤山はなかつた時に、小崎夫人が大きい鉢に山盛り、鯔を下さつたことは、今も尙ほ感謝して居る處であります。かういふわけで私共の東京生活の第一歩は、先生御夫婦の御世話で始められたと申してもよいのであります。

予と此の  
教會

明治十九年の十二月から、三十五年の五月まで、私共は時に此の教會の後、一時に前、時に横と常に此の教會を中心として、十數年住んで居たのであります。この教會に就ては、實に淺からぬ因縁があるのであります。家内なども當教會に出席することが少ないにも關らず、常に教會の幸福を祈つて居るのであります。私も勿論祈つて止まぬことであつて、此の教會の功を稱へるのは、決して偶然ではないのであります。

#### 六 小崎先生夫人

先生の夫  
人

先程海老名先生、綱島先生の話された中に、殊に小崎夫人のことを話されまし

た。私も逐一賛成であります。私共は小崎先生に感心するよりはとは申しませぬが、同様に御夫人に感心する者であります。これは嘘でも無く、捏造でもありません。桂公が言はれたことがあります。「小崎さんはなか／＼いゝんだが話すことが少し長い。奥さんは話の分りが早くてよい」と。それで夫人の方が全權大使として行かれると話が早く分つたのであります。それは如何してかと申しますと、小崎先生は田舎者であります。——私も田舎者であります。——奥さんは江戸ツ子であります。要するに小崎先生は田舎者、殊に熊本の人であります。熊本人と申ししても、熊本人の中にも善い人と悪い人があります。日本人の中にも善い人と悪い人があり、米國人の中にも善い人と、悪い人があります。何處にもあります。半分半分の人もあります。先程綱島先生が夫人に就て申されましたが、あれは少し賞め過ぎてをります。私はあれ程には申しませぬ。あの通りであれば、小崎先生は此の教會ばかりでは無く、日本全國の教

會をやつてもよいのであります。併し大抵あの通りであつて、私も實に感心して居るのであります。

七 本來面目是僮夫

先生は田舎者

扱て先生は田舎者であり、殊に熊本人の特色を持つてをられます。先程綱島牧師は慧眼にも、小崎牧師には多分に戦ふ氣持、戰鬥力が多いといはれました。全くその通りで小崎先生は見掛けはやさしい風で、ぼんやりして居られますが、戰鬥力は實に多いのであります。實にひどいのであります。昔はすつぽんに咬まれたと申しますが、先生に咬まれたら實にあぶないのであります。強いのであります。

重厚にして前者

私が小崎先生に感心するのは、第一に人間が重厚であること、次には非常に勇氣があつて強く、弱いやうな顔をしてゐて強いことであります。時としては頑冥不靈のやうでもあるが、それを立派に解釋すると實に偉い所があるのであり

之を助くるに夫人在り

ますが、動かぬと槌でも動かぬことがあります。併しそれを助くるに、立派な夫人がある。夫人は江戸ツ子氣性で、洒々落々、大竹を割つた如く、水の流れる如き人であります。かういふ夫人と一緒になられたことは、實に小崎先生の仕合せであると思ひます。先程綱島牧師は私がブース夫人に就て書いたことを申されましたが、若し私が小崎先生御夫婦の事を書きますならば、あれ以上に書きます。私は實に此の御夫婦の爲めに、今日のことが出來たのを感謝して止まぬので御座います。

幸福な人

小崎先生が實に幸福であられるのは、第一善き夫人を得られたこと、第二先生が非常に健康であられること、第三善き相續者を得られたことであつて、これは何人も追隨することを許されぬ、先生の仕合せであります。これも畢竟五十年間、先生が身を捨て、働いて來られた報であらうと信ずるのであります。

只先生に對する感謝の念

此の如き小崎牧師御夫婦を持つ靈南坂教會は、實にその幸福を誇るに十分であ